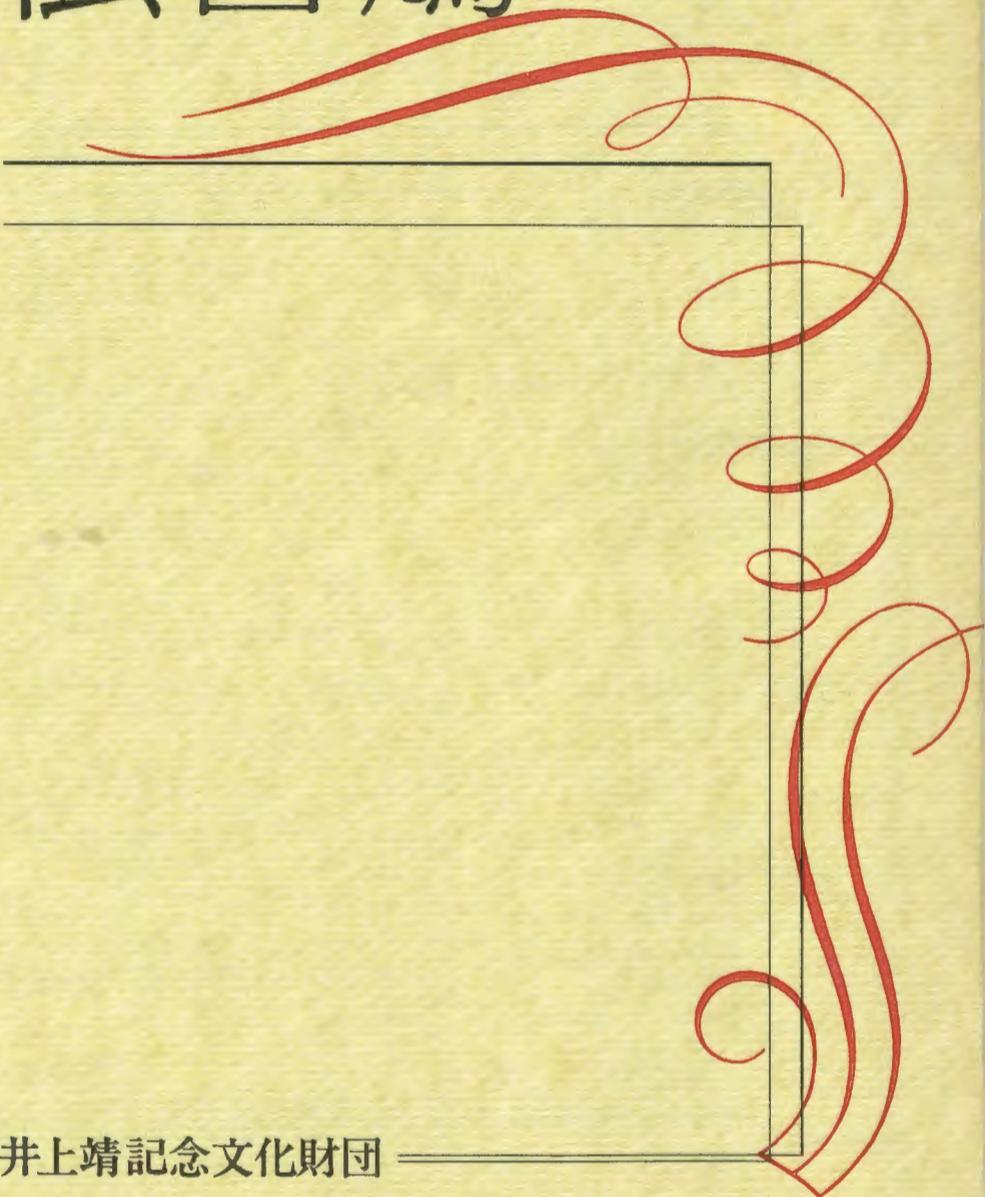


伝書鳩

第6号

井上靖記念文化財団

A decorative graphic element consisting of a black L-shaped line that forms a frame on the right side of the page. To the right of this line, there are several flowing, red, ribbon-like swirls that curve and loop downwards, adding a traditional aesthetic touch to the design.

目次

「きりん」の二年

藤本義一

一～四

井上靖における戦後の出発

藤沢全

五～一七

退院してからのご挨拶

井上ふみ

一八

井上靖文化賞贈賞

一九～二六

吉原工業高校に碑が建ちました。

二七～二八

「流星の碑」に寄せて

井口哲郎

二九～三一

世田谷文学館「井上靖展」を見て

三二

書き留めたことを雑然と

安藤尊夫

三三〇 四二

理事長時代の井上先生

井口一男

四三〇 四六

詩・晩夏

井上靖

四七〇 四八

私の備忘録

浦城いくよ

四九〇 六五

井上靖研究会の発足について

六六

財団・事業報告

井上修一

六七〇 七二

鳩のお知らせ

七三〇 七六

引き出し整理

七七〇 八〇

『きりん』の二年

藤 本 義 一

敗戦後すぐの混乱期、昭和二十三年暮れに、東京本社へ転勤なさるまで、井上靖さんは毎日新聞社学芸部副部長をしておられた。

その社屋から百メートルほどのところ、のち産経新聞社のビルが建つあたりに、出版社の尾崎書房があり、かつて日活撮影所で伊丹万作の助監督をしていた文学青年の社長尾崎橘郎さんは、文化新聞を出したいという相談を井上さんから持ちかけられた。あらゆる物資が不足していた時代。紙にも統制令がしかれ、活字に飢えた人達の間で、少ない出版物はアツという間に奪い合いで売れた

ものだが、尾崎夫人の実家が四国の製紙会社だったおかげで、正規の配給以外に多少の融通は付いたのである。

終生を神戸で過した詩人竹中郁さんは美術にも造詣が深く、井上さんの依頼を受けて毎日新聞の紙上にしばしば批評を寄せていた。昭和二十一年四月神港新聞社に入社して初めて月給を受け取ったが、同年十月退社。テニスコートもあつた住まいは空襲で全焼し家族八人の生活がかかつていた。井上さんは尾崎さんに童詩雑誌の発行をすすめ、自らも編集を担うと話して、その監修を竹中さん

にゆだねたのである。

こうして竹中郁さんは、以後終生をこどもの詩の育成に費やすこととなり、『きりん』は昭和二十三年二月に創刊した。

誌名は最初井上さんが「たんぼぼ」と言い、竹中さんは即座に「きりん」を主張この名になった。

当時二十二歳で古本屋を自営していた私にもお声がかかり、学校へ『きりん』の配本をしたり、単行本の校正など、なんでもやることで下つ端社員になることができた。

編集には竹中郁さん、井上靖さん、朝日新聞社編集委員で、詩集『たんぼぼ』など著作のある詩人坂本遼さん、新大坂新聞社にいて、後年『やちまた』で読売文学賞をとられた詩人足立巻一さんのほか、私と同年輩の星芳郎さん、浮田要三さん。若手三人の常勤者以外は、昼の勤めを終えると、ここで先ずひと風呂浴び、この辺り一帯の闇市から社長が仕入れてきた夕食のご馳走になる。それ

からの会議では贅沢な企画が次々と出て、それらがみんな実現した。たとえば表紙や挿し絵には脇田和、小磯良平、吉原治良、須田剋太さん、エッセイでは安西冬衛、小野十三郎、杉山平一さんなどなど、この地味でささやかな雑誌には、考えられないようなみごとな顔ぶれが揃って作品で参加し、文学を通しての情操育成に協力している。

その成果が実つて、また一段とすばらしい詩作品を子供たちに書かせたのだろう。毎号息を飲むような児童詩が届けられ、紙面を飾る黄金期が続いたのである。

編集部で会議のとき以外の談論風発のなかから思い出される話も多い。

井上さんの作品『三宮炎上』の主人公になった女性は、実際に戦後ドサクサの時代に神戸三宮の闇市界限で女番町を張っていたのだが、その奇想天外な体験を語りに井上さんを訪ねてきた。新聞社からさほど遠くない北新地の小料理屋へ案内さ

れ、一室でまず挨拶をとった途端、この若く眼もと涼しい美人がサツと座布団をとつ払うなり、ヤクザが啖呵を切る時の姿勢、片膝ついて右手を前に出し、巻き舌で「お控えなすつて、手前生国と発しまするには……」に始まる口上を一気に訴えかけた。さしもの井上さんも下肝を抜かれたが、それに続いた一連の話が、あの小説そのまままで：
：と聞かせてくださった時の興奮は、いまま頭のかなかに鮮やかである。

中学校を同級生で終生親交をもたれた小磯良平さんと竹中郁さんは、大学卒業後すぐに二年間のパリ遊学で多くを得てこられたが、ロンシャン競馬場での思い出話しははずんだ。あげくそれでは私たちもと、井上さん、竹中さん、足立さんたちで休日に京都西郊の淀競馬場へ足を伸ばされた。井上さんが運よく大儲けなされたことで、編集部は以後しばらく競馬談義に花が咲いた。

まだ二十代前半の私が淀や仁川、そして園田へ

通うようになったのも、その熱気にあおられてのことである。地方競馬の園田ではコースの内部一帯が農園になっており、お百姓さんが天秤棒をかついで肥やしをふりかけていたのに驚かされた。食料難の時代であった。

竹中さん、足立さんのお宅に近い神戸の須磨で、おいしい寿司を食べさせてくれる店があるということ、七、八人連れだつて食べに行つたことも懐かしく思い出される。

こども向けだからとほどほどに妥協せず、常に贅沢な紙面を提供して、こどもたちの作品育成につとめた『きりん』だったが、この運動は全国的な広がりとならず、発行部数が伸び悩んで維持困難となり、翌二十五年一月をもって半年休刊ののち、B五判半載四十ページの体裁に変え、児童詩の一篇ごとに選評を付けた。同年五月『きりん』に発表された児童詩を中心にして『全日本児童詩集』が尾崎書房から刊行され、経営回復が計られ

たがかなわず、同年九月尾崎書房は閉鎖。『きりん』発行は星芳郎の手に移された。

私はこの時点で尾崎書房を退社。大阪で月刊大衆文学誌『太陽』や、『こども太陽』を出版していた太陽社へ入社した。

『きりん』は引き続き昭和三十七年まで大阪で、その後、東京の理論社に発行を移譲して小見山平さんの名義で昭和四十六年三月まで続くが、通刊二百二十号で終了した。曲折はあつたが、あらゆる困難を排して、初志はここまで受け継がれた。

昭和五十四年（一九七九）五月、竹中郁さんの九冊目の詩集『ポルカ マズルカ』が潮流社から刊行され、翌二月に読売文学賞を受けた。

その頃、井上靖さんは『井上靖全詩集』の刊行を機として、大阪での三十年ぶりの旧友再会を熱望しておられた。

足立巻一さんがこの両全詩集出版記念会を読売文学賞受賞祝賀会と併せて計画され、昭和五十五

年三月十三日、大阪のホテルプラザで盛大に開催された。

当日新幹線で西下して、何かお手伝いをと早めに到着したら、足立さんから「藤本さん、司会は君に任せるわ。うまいことやつて」と仰せつかった急遽打ち合わせ。この大役を無事果たし、これまでのご恩にちよっぴりお応えでき、嬉しかった。

それから二年後の昭和五十七年三月七日、竹中郁さん七十七歳で死去。晩年は子供の詩を通じて感性を育てることに全てをかけたが、その段取りをおつけになったのは、井上靖さんであった。

生涯を通じて変わらなかつたこの人たちの交流の一端を垣間見ることのできた私にとつても、「きりん」の時代は至福のときであった。

文中にご登場の全てのみなさまに敬称を用いなかつた非礼をここにお詫び申し上げます。

（文筆家）

井上靖における戦後の出発

——詩作開始——

藤 沢 全

(一)

筆名と実名をひとつにしているが、井上靖の戦後の文学的出発を考える場合、その実名だけによる（生活者）の部分と、再び筆名に戻つての（文学者）としての歩み出しとの接点に（敗戦）があり、また、それら二様の展開軸もまた（戦争）に依つていたことに留意する必要がある。

ここでまず、前者（生活者）の部分との絡みであるが、これは三十路みそぢに入った靖が、忌避しがたく届いた三度目の召集令状によつて北支那へともつていかれ、病に罹つて危うく生還したあとの文学的な沈黙期を指す。おりからのファシズム狂騒下、帝国日本の進路（施策）の危険に気付き、文学の自立が脅かされたり、作家がいやおうなく戦争に加担させられるかもしれないといった危惧から、自分を守り、文学を守るための

時局をにらんだ周到なる対応というべく、その確信はゆらいでいない。^(注1) 事実、あの若き日のチャンス——週刊誌「サンデー毎日」の懸賞募集に応募した小説『流転』によつて第一回千葉亀雄賞を受賞し、この栄冠によつて新進作家の誕生を江湖に印象づけるとともに、すぐさま雑誌社から小説原稿の依頼がありながらも、このあとの靖は決して執筆を引き受けようとはせず、そののみか詩作の筆まで置いて、新聞社の美術欄・宗教欄担当記者としての生活に徹していった。おそらく他者には判りずらい心的葛藤があつたことと思われるが、そのことはさておくとして、これはこれで戦争一色の時局と世情に対する警戒心かられた、実直なる批判の表わし方（対応の仕方）であつたのである。周知のように、昭和十二、三年頃から昭和二十年の前半にかけて文学活動が空白なのは、以上の切実な理由による。

次に（文学者）の風貌へと移る、文学活動再開との絡みであるが、核心をなすこの部分の視界は明瞭であ

る。すなわち、昭和二十年（一九四五）八月十五日、連合国側が突きつけてきた「ポツダム宣言」を受諾して帝国日本が瓦解した。被つた諸々の悲惨な状況と切り離して言うならば、靖にとつての敗戦は、一挙に重く頭にのしかかつていたものが取り除かれ、断筆の条件が無くなつたわけで、靖は今度こそ心おきなく文学領域へと立ち戻る、心底から喜ぶべき契機を得たのだつた。たとえば鼎談『わが文学の軌跡』（「海」昭和五十一年六月号）の中から靖の科白部に當つてみよう。

わたしの三十代は戦争、戦争でした。応召した野戦の生活も、やはりたいへんな経験でしたが、その戦争時代がしだいに暗く烈しいものになつていった。空襲の烈しくなるさなかで、妻の父の死、次女の出生、疎開。そして応召の準備。わたしだけのことではありませんが、生きるに必死でした。ところが終戦と同時に、ふいにまったく異なつた時間のなかに置かれた。戦争というものにもやは

り終わりがあつた、そんな感じてしたね。やたらに明るく、空虚でした。長い戦争時代の反動のよなもので、なにか贅沢なものを、まったくの遊びを書きたいという気が強かつたですね。

とは聞き役の辻邦生に答えた当該部である。ここでいみじくも靖自身の戦後の出発について秘めるナゾを自ら解いていることに注目したい。すなわち、自らの戦争体験および家族を襲つたダメージを靖は本格的に文学の題材にしなかつたのはどうしてか、といった伝記上の疑問に対して、「戦争時代の反動のようなもの」「贅沢なもの」「まったくの遊び」を書きたかつたといっているわけだ。戦時下の危機的状況を人間の実存の問題として問うたところの、例えば野間宏・大岡昇平・梅崎春生らとも比すまでもなく対照的な方向にあつたことが判る。しかし、国家と戦争あるいは政治と文学の関係に興味を示さぬ靖の姿勢は、そのまま井上靖文学の特質をなしてゆくという点で、彼等との差異

するところは、これはこれで靖の文芸意識なり資質なりに依拠する、独自とするところでもあつたという点とであらう。

もうひとつ注目しておかなければならないのは、人類史上初めての原子爆弾が広島（八月六日）に続いて長崎（八月九日）の上空で炸裂した直後の靖の走筆ぶりである。周知のようにあの暑い夏の日の天皇のラジオ放送があつた際、ほとんどの同僚が茫然自失、職場が無機能状態となつたというが、その中であつて靖は毅然と記事を書き、翌日の朝刊（表裏二頁）を発行するに中心的な役割を果たした。

玉音ラジオに拝して

十五日正午——それは、われわれが否三千年の歴史がはじめて聞く思いの「君が代」の奏でだった。

その荘厳な「君が代」の響の音が消えてからも、

ラジオの前に直立不動、頭を垂れた人々は二刻、

三刻、微動だにしなかつた。生まれて初めて拝し

た玉の御声はいつまでも耳にあつた。忝けなさ、尊さに身内は深い静けさに包まれ、たれ一人毛筋一本動かすことはできなかつた。幾刻か過ぎ、人々の眼から次第に涙がにじみあふれ肩が細く揺れはじめてきた。本土決戦の日、大君に捧げまつる筈の、数ならむ身であつた。畏くも、陛下にはその数ならぬわれら臣下の身の上に御心をかけさせられ、大東亜戦争終結の詔書をいま下し給われたのであつた。

——帝国ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス
爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス
朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ

玉音は幾度も身内に聞え身内に消えた。幾度も幾度も——勿体なかつた。申訳なかつた。事茲に

到らしめた罪は悉くわれとわが身にあるはずであつた。限らない今日までの日の反省は五体を引裂き地にひれ伏したい思いでいっぱいにした。いまや声なくむせび泣いている周囲の総ての人々も同じ思いであつたろう。日本歴史未曾有のきびしい一点にわれわれはまぎれもなく二本の足で立つてはいたが、それすらも押し包む皇恩の偉大さ！すべての思念はただ勿体なさに一途に融け込んでゆくのみであつた。

詔書を押し終るとわれわれの職場、毎日新聞社でも社員会議が二階会議室で開かれた。下田主幹が壇に立つて「詔書の御趣旨を奉戴するところに臣民として進むべきただ一本の大道がある」と社員の中から進むべき道を説けば、上原主筆続いて「職場を離れず己が任務に邁進することのみが、アツツ島の、サイパンの、沖縄の英霊に応える道である」とじゅんじゅんと声涙共に下る訓示を与え、最後に鹿倉専務また社員のこれまでの「闘い

抜く決意」を新しい日本の建設に向けることを要請した。われわれの進むべき道は三幹部の訓示をまつまでもなくすでに御詔勅を拝した瞬間から明らかであった。

一億団結して己が職場を守り、皇国興建へ新発足すること、これが日本臣民の道である。われわれは今日も明日も筆をとる！

（「大阪毎日新聞」昭和二十年八月十六日第二面）

右がそれで（無署名）、当該時の国民の衝撃ぶりの一端と、天皇への畏敬の念のもとで涙を滴らせ、明日への生の確信を伝えているわけである。しかし、その執筆者が靖と判つてみると（本人はこれを生涯の誇りとしており）、「われわれ」と複数主格表言をなすも、これは靖ひとりの言辞として、さりげなさの中に己の自我を投影させていることがわかる。その限りで「玉音ラジオに拝して」は、単なる新聞用の文章とのみ言うのではなく、これを書くことで靖自身、敗戦の

瞬間の自己を確めるとともに、これを分岐点として過去化する戦争の時代と訣別し、新時代へと足を踏み入れていくこととなった。当該の文章がことさら格調が高く、ポエティカルな響きさえたたえて美的であるのは、そのためかもしれない。

（二）

さて、このように戦後を迎えた靖は、まず詩の領域に専念していく。その最初の詩化の対象となしたのが、北支那へと出陣した親友高安敬義の戦死で、靖はこの悲報を終戦の直前に知って恩師の久松真一へと報告し、その足で二人の共通の場である龍安寺へと出掛け、同寺の石庭と向き合つてこの亡き友の死を悼んだ。そして間もなく（終戦を迎えた直後）、一対をなす作品を創作して母校の「京都帝国大学新聞」（昭和二十一年五月二十一日号）に発表した。一校友の詩作発表というレベルを超え、母校にゆかりのある者の戦死が暗に伝わるような、そして皆の追悼となるような、

そういう痛惜な思いに駆り立てられながら……。

石庭^(注4)——亡き高安敬義君に——

むかし、白い砂の上に十四個の石を運び、きびしい布石を考へた人間があつた。老人か若い庭師か、その人の生活も人となりも知らない。

だが、草を、樹を、苔を否定し、冷たい石のおもてばかり見つめて立つた、ああその落莫たる精神。

ここ龍安寺の庭を美しいとは、そも誰がいひ始めたのであらう。ひとはいつもここに来て、ただ自己の苦悩の余りにも小さきを思はされ、慰められ、暖められ、そして美しいと錯覚して帰るだけだ。

友^(注5)

どうしてこんな解りきつたことが
いままで思いつかなかつたらう。

敗戦の祖国へ

君にはほかにどんな帰り方もなかつたのだ。

——海峽の底を歩いて帰る以外。

この二作——詩「石庭」と詩「友」の間柄は、かりに龍安寺の石庭を亡き友高安敬義の魂の回帰する場——墓所と見立てたときの、そこへ嵌め込む正碑の銘が「石庭」で、これに添える副碑の銘が「友」であるといつた、これはこれで魂のふれあいの図柄となつていのである。しかも、当該の二篇が高安敬義の詩域と結び合っているのだ。すなわち、詩友でもある彼の第二詩集『第二詩集』（学而社・昭和十五年）に所収の次の二作に関わる。

庭石

石は円々^{まるまる}と頭を刺つて

きれいな朝風に吹かれて御座る

空飛ぶ鳥が ポツンと糞を落して

南無阿弥陀仏

蒼空無片雲 十万有方寸

平凡な完結の点かヒトオド

友へ——へば詩人より

一汗かいた仕事の後の一風呂は極楽だ

——産湯うぶゆから湯棺まで——

処で一寸尋ねるが

懷疑派かね

それとも君は英雄か

それとも……………

——産毛うぶげから白髪まで——

驚ペンを磨り切る文体だ

主格・所有格・目的格・関係代名詞接続詞

コロン・セミコロン あゝ

インク壺は虚つぼだ

最後の符号を何うしよう

感嘆符か

疑問符か それとも

さあ 僕も

斯んな変挺な詩を打棄つて

さつさと一風呂浴びに行かう

(以上二篇『第二詩集』より)

これらはいずれも巻末近くにこの順番で収められている。前者の「庭石」は、どうやら由緒ある古刹のへ庭に佇み、そこに据え置かれた風致を添えるへ石を視座しての純粹詩。後者の「友人——へば詩人より」は、詳しく輪郭化していないものへ僕とへ君との交遊を透し絵とし、ただにへ僕ひとりの現実感の中で君を念頭に科白を試みた純粹詩ということになる。巻末の「跋」に「表現の獲得は思想を生み、思想は又表現を呼び需める。それは無限の課題としてわたしを駆立てる」とあり、掲出の二篇にも哲学専攻者らしく万般を思索する作者の風貌を滲ませていよう。名作という

には疑問があるが、それはそれとして、彼もまたモダンズムの洗礼を受け、自分なりの純粹詩にこだわる気鋭の詩人であった。

この無二の親友が「此の夏や汗も血も只に弁わきまへず」の句を恩師の久松真一に遣わし、同じく恩師の田辺元から贈られたシラーの詩集を携えて戦場へと発ち、それから約半年後にはこの世にいなかった。——ということであつたから、前記したように靖の衝撃感筆舌に尽くせぬものがあつたらしい。先掲の「石庭」と「友」は、かくして詩として結晶化をみたのである。

靖はこれを創作する際に、高安敬義にも前掲の詩篇一対があることにかんがみ、詩の題名をそれらと近似で対応させ、詩行の長短を反対にし、相向き合うかたちで呼応、追悼の思いを清冽な詩情に託したのであつた。

これだけではない。靖の施しは「石庭」の〈庭石〉の数にまで及んでいる。「むかし、白い砂の上に十四個の石を運び、きびしい布石を考へた人間があつた」とある散文詩の冒頭部は、〈虎の子渡しの庭〉ともいわれ

る龍安寺の石庭に布置された石の数とは合致しない。

実際のそれは、大小合わせて十五個（これは同寺の案内パンフレットにも書いてあり）。しかし詩「石庭」のそれは「十四個の石」とあるので、どの角度から見ても最大限見える範囲の数としてでもあろうか、詩化に際しては意図的に細工したことがわかる。（学生時代から頻繁に足を運び、新聞記者時代にも宗教欄を担当して度々ここを訪れている靖が、石の数を間違える筈がない）。では如何なる意図によつてか。おそらく石一個の欠落は、永遠の未帰還者となつた高安敬義に対する喪失感、もしくは彼の遺骨が納まる場所としての空無化した、透明なる聖域として確保されているということではあるまいか。いずれにしても高安敬義の戦死は、その悲しみの代価ゆえに靖の文学意識を刺激し、まずは詩作面を活気づかせる契機となつたことだけは間違いない。

事実、このあと「野分」「比良のシャクナゲ」「高原」「半生」「渦」「流星」「シリア沙漠の少年」「漆胡

樽」「カマイタチ」「不在」「記憶」「元氏」「生涯」「瞳」

「海辺」などといった具合に、同じく散文詩型の作品が頻繁に作り出されていく。文学領域で戦後のスタートを切る靖にとつて、詩というものが如何に表現の欲求を満たし、有効な手段であつたかということの証左でもある。

かくして、戦後の文学的な立ち上がりだが、憎むべき〈戦争〉との決然たる別れと、惜しくも戦地で肉体を喪失した愛すべき友へ〈高安敬義〉を悼み、彼の魂魄への慰撫をイメージするといった二重構造のもとで行為化していたことが浮き彫りになる。しからばこのあとどうなっていくのか、すでに多くの指摘があるように、詩は詩として独自化しながら併行し出す小説領域と混交をみせ、また遂次拡大していくジャンルでの展開もある。紙数がつきたので他日を期すこととし、以上、少しく〈靖伝〉の書き起こしの部分として擱筆する。

〈注一〉

靖は昭和十二年九月三日に応召、月末に第三師団野砲兵第三連隊輜重兵中隊の二等兵(のち一等兵)として北支那へと出陣するが、その年の十一月、脚気等の病により野戦病院に収容され、内地送還となつて昭和十二年一月十九日に大阪港に上陸。名古屋の野戦病院での療養生活を経て同年三月十六日付けで召集解除になつた。しかし、陸軍の軍属でなくなつたからと言って、いつまた再召集になるかもしれない、新聞社に復職したからといって安閑としていられるものでもなく、常時不安状態にあつた。このことは爾後の戦争の推移に照らしても察するにあまりあるところである。そうしたなか、靖の外周は重苦しい鉄壁の囲いとなつていく。

出版関係でいえば、①あらたに施行された法規、②日本文芸家協会フランドル西文芸家協会間の翻訳に関する協約取扱規、③著作権に関する仲介業務に関する法律、④映画法——などがそれで、これらは時局に即応の規制を骨子としていた。大陸従軍を経験している靖にと

つてとりわけ

①——、「陸軍軍人軍属著作規則」（昭和十二年三月二十二日、陸達 第十一号）などは、身の竦む思いに駆られたことであろう。ちなみに、既に文壇で活躍している佐藤春夫・倉田百三らは昭和十四年四月、「経国文芸の会」を興して「芸術家の国家的責任を自覚し、文学に高度の政治性を求め、国家の文化的使命を創造せん」（同会の設立趣旨）との対応をとり、また別に、大林清・富田常雄らは昭和十五年十月、「国防文芸連盟」を結成して「国防国家体制の一翼として、作家活動を通し、文芸報国の誠を尽くさんとす」（同連盟の設立趣旨）動きをなした。適宜ではあるが純粹であるべき文芸領域が戦時の時局に凌辱されていた。そして、昭和十七年六月の「社団法人日本文学報国会」の成立へとつながっていく。こうした一連の展開は、むしろ当該時点で予想は無理だったが、靖の資質から言って先見性は十分あったろうから、情報産業の最たる新聞社にいてすこぶる表現活動が悪化していたこと

を直覚していたことだけは疑い得ない。

靖は日増しに抑圧される文学状況を洞察し、その文学領域へと自ら進み出ることを躊躇、否、自重したということであろう。

（注2）

高安敬義は、千葉県香取郡新島村扇島の医系十六代目の高安家の二男で、大正三年（一九一四）三月十二日に出生。父宗悦（凌節・松園とも号す）は、明治三十七年（一九〇四）十月に千葉医学専門学校医学科を卒業して翌年、陸軍三等軍医に任官（正八位）。日露戦争に従軍後、須田きよと結婚して間もなく郷里で開業。地元の医療と文化事業などに貢献するも、大正八年（一九一九）一月二十六日死亡。享年三十八。母きよは茨城県行方郡千澄勢村牛堀の漢学者須田幹三の二女。日本女子大学付属高等女学校を卒えて結婚、五男二女を生んで昭和四十九年八月一日死亡。享年八十五。この両親のもとで育った敬義は、大正九年（一九二〇）

四月に新島尋常小学校に入学し、大正十五年（一九二六）三月同校卒業。四月千葉県立千葉中学校に入学し、昭和六年（一九三一）三月同校卒業。四月水戸高等学校文科甲類に入学し、昭和九年（一九三四）三月同校卒業。四月京都帝国大学哲学科に入学し、井上靖と交遊を開く。翌年八月に靖らと詩誌「聖餐」を創刊し、詩と詩論の实践活动に入るが、昭和十一年（一九三六）四月「聖餐」第三号をもって終刊。昭和十四年（一九三九）三月京大を卒業。（卒業論文・題名「倫理」は哲学専門雑誌に載る）。直ちに京大大学院へと進み、特待生として静穩な学究生活を続けるが、昭和十八年（一九三四）九月二十三日付けで理工系以外の学徒徴兵猶予制限が撤廃されたことに伴い、同年十一月初めに赤紙が届く。その間、昭和十五年（一九四〇）四月第一詩集『収穫』（三七篇）を、十一月第二詩集『第二詩集』（二六篇）をともに学而社から出版。戦況が日増しに悪化するなか早々に中国大陸へもつていかれ、応召から六ヶ月と十日経つた昭和十九年（一九四

四）五月十五日、中国河南省信陽縣長台関において絶命。日本の敗北が目前に迫つた昭和二十年（一九四五）七月（日付不詳）、その戦死が高安家に伝えられた。同月三十一日に地元長泉寺において他の御柱みはしらと共に合同の村葬が執り行なわれ、同家の墓所みほでようやく安き眠りに入った。享年三十。「肅忠院鴻烈敬義居士」。この村葬のあと遺族（家督者は第十六代宗博しげゆき）長兄から幾人かの京大関係者・友人に敬義戦死の報が伝えられた。知らせを受けたうちのひとり、靖は妙心寺の塔中に住む久松真一を訪ね、そこで敬義の遺句——「此の夏や汗も血も只に弁へず」に出会い、その足で龍安寺の石庭へと巡つて悲しみに耐えた。後日、詩「石庭」「友」を作つて手向ける一方、エッセイ「忘れ得ぬ人々」「美しきものとの出会い」「私の自己形成史」「龍安寺石庭」などの中で適宜に敬義との思い出を刻む。ただし一部のエッセイの中に「此夏や血も汗もただにまきまえず」と当該の遺句を紹介しているが、これは正確さを欠く。単なる誤記と思われる。

(注3)

久松真一は、田辺元とともに靖と敬義の共通の恩師。妙心寺の塔中に居住していたので、下宿が近いということもあつて、適宜に彼等の訪問を受け、美しい師弟関係を結んだ。この縁に深く依るところがあつて、敬義の妹幸子さん(現姓桜井)方に敬義に関して認めた書簡が残されている(昭和五十一年九月二日付)。その一節には次のようにある。

「お兄様は京都大学在学中は石庭でこの頃観光でも有名になつてまいりました龍安寺下の下宿に住んでおられ、近くの私の寓居によく訪ねて来られ、談論風発致したものです。思索能力がすぐれ論論に関心深く成績も優秀であつたのみならず、親友であつた井上靖さんのおつきあひもあつて文学的情操が豊かで、旧家育ちのせいもあつて品格がおのづから備はり、お名前のように敬・義兼ね備はつた好学徒でした。今日迄存命ならばユニークな倫理学者が出来ていただらうにと

惜しまれてなりません。昭和十八年御出征当時の遺影を、お送りいただいたアルバムで拝見しひじお一入なつかしさが込み上げて来ます。あのときもお名残にお訪ね下さつて長時間別れを惜み、即興の句をのこされました。アルバムに出ておる『此夏や汗も血も只に弁わかまへず』もその一つでした。『百舌鳥の声……思ひたゞれけり』といふやうな決心の句もありました。ひそかに生還を期しましたのに、『倫理』といふのは厳しい中に情緒のこもつた印象深い卒業論文でした。」(注、敬義の遺句として「此夏や……」とあるが、「此の夏や……」が正しい)

(注4)

エッセイ「龍安寺石庭」(「きょうと」第三号・昭和三一・四)の末尾に「石庭」と題した詩が掲げられている。内容は同じであるが、サブタイトルの付け方および詩行のかたちに変形している。

〔注五〕

高安敬義をして詩のタイトルとなす。後半部「敗戦の祖国へ／君にはほかにどんな帰り方もなかったのだ。／——海峡の底を歩いて帰る以外。」とあるが、

これは長編小説『樺の木』（『日本経済新聞』昭和四十五年一月三日～八月十五日、二二四回）中で主人公と亡友との会話——「一体どこを歩いて来たんだ？」

「海の底だ」「海の底を歩いて来たのか」「海の底しか歩くところはないよ」といったところと照応する。

で、この場合の「海峡の底」のイメージは、靖が教王護国寺（通称「東寺」）の講堂内に置かれている二十一体の仏像を拝観した際の、仏像によって作り出されている世界（空間）から受けたイメージに依っているかもしれない。（学生時代および戦時中新聞社の宗教欄担当記者として度々訪問）。「東寺の講堂と龍安寺の石庭」（『美しきものとの出会い』『文芸春秋』昭和四十六年一月——四十七年三月連載、その7）の中に、「堂内に一步踏み入れた時から、海底の淡い光の中に

でもはいったような静けさに包まれる。そしてやがてその海底の微光は少しずつ青黒いものに変わって行き、その海底の静けさは少しずつ波立ったものに変わって行く。静かで妖しい。」とある。なお、右のあとに詩「石庭」のシチュエーションに直結する会話仕立ての文章が配置されている。

（二九九九・八・一五記）

退院してからのご挨拶

井上ふみ

九十一歳になった。いつの間にかこんなお婆さんになったのか、自分でも分からない。

最近は何と庭の野菜作りを楽しみにしている。一昨年はニンジンを蒔いた翌日から、急なことで入院することになった。近くに国立第二病院があつて、十階建ての新病棟が出来たので、そこに入院することになった。九階の病室であつた。大腸の一部切り取りの手術であつた。

専門の先生の手術を受けて、手術そのものは大成功に完了したのに、院内の悪性風邪に菌を受けて、十日ばかり意識がなかつた。家族の者はもう私が死ぬと思つたらしいが、命冥加があつて生き延びた。幻覚があつたりはしたけれど、

最近は何とか家のなかをふらふらしながらも、手放して歩ける程度にはなつた。医者からも、暖かい日は少し庭に出ても良いと言われている。

天氣が良ければ、明日は小かぶらを蒔く。四月十二日は「さつきみどり二号」(どじょういんげんの最上)を蒔こうと思つている。八月にはいると堅くなるので、それまでに食べ終わるように蒔く。三十五センチ間隔に二粒ずつ、隣の畝と交互になるように蒔く。十日おきに水を蒔けば次々にでき、食べられる。細くて筋がなく、柔らかくて、最上である。そのままぱつと塩をふつてもよく胡麻和えも良い。

平成十三年四月三日 氣候不順。

(井上靖記念文化財団理事長)

井上靖 文化賞贈賞

第六回・平成十一年 一月二十九日

加山 又造氏に贈る

受賞の言葉

井上靖文化賞受賞の知らせを受けた時、私は初め、その意味が急にのみ込めなかった。迂闊にも井上靖文化賞が、美術をも対象にしていたのを知らなかつた。私が初めて井上靖先生にお目にかかったのは、もう三十数年前になる。私が三十代後半、井上靖先生の短編集の装丁をさせていただいた頃、井上先生は、私の仕事をめでて下さり、いつも力づくはげまして下さった。以後、先生がお亡くなりになるまで、まことに一方的に、いつ

もかわらぬはげましをいただいた。その間、私が初めて造った画集にかなり長文の解説の序文を頂いて、随分感激した。それに対し、私の方は何一つお返しも出来ずに終わってしまった。

そして又、この度、ゆるみかけた私の心に力づよい、叱責に似たはげましをいただいでしまった。まことに有難く、申し訳のないことである。前回までの鮮やかで、ぶ厚く貴重な業績の受賞者に比して、私は何か、実に申し訳ない気がしてならない。挿絵がうまく出来るようにと、原稿を自ら朗

読して下さった、井上靖先生のまことになつかしい
音声をしみじみと思いだす。

今又頂いてしまった有難い励ましを思い、これ
から何かを返していかなくてはならないと思う。

贈賞理由

加山氏は、伝統的な日本画の世界に、新しいモ
チーフや構成を取り入れながら新境地を開拓し、
非常に卓越した技法、表現力を持つて、多くの作
品を発表し続けている日本画家である。さらには、
北京、上海、ロンドンと展覧会を開催し、意欲的
に世界に日本の美を紹介することに貢献して来た
業績などを、この賞の贈賞理由とする。

日本画家・加山又造氏（略歴）

一九二七年・九月二十四日・父西陣織図案家、祖
父・京都狩野派絵師の家に生れる。
一九四四年・京都市立美術工芸学校終了。東京美

術学校入学。

一九四九年・同校卒業。山本岳人に師事。
一九五〇年・創造美術展で研究会賞を受賞。
一九五一年・新制作展で新作家賞を受賞。
一九六六年・多摩美術大学教授に就任。
一九七三年・日本芸術大賞受賞。
一九八〇年・芸術選奨文部大臣賞受賞。
一九八八年・東京芸術大学教授に就任。
一九九〇年・『加山又造全集』全四巻刊行。
一九九四年・エッセイ集『無限の空間』を刊行
一九九六年・大英博物館で「加山又造展」を開催。
一九九七年・文化功労者に顕彰される。
また、東京国立近代美術館障壁画「雪・月・花」、
身延山久遠寺本堂の天井画「墨龍」などを制作。

遷考委員（五十音順・敬称略）

大岡信 辻邦夫 樋口隆康 平山郁夫

第七回贈賞・平成十二年 一月二十六日

大野晋氏に贈る

受賞の言葉

井上靖文化賞を下さるという。これまでの受賞者を見ると、音楽家、画家、文学研究家、哲学者という幅広い領域の方々である。それが「文化賞」であるゆえんなのだろう。すぐれたそれらの人々の中に加えられることを栄光に思う。

東京の下町に育った私には言葉を意識するのは、いつも「下町と山の手」という図式においてだった。それが高等学校に入り、「日本とヨーロ

ッパ」という図式へと展開した。私はヨーロッパに飛び込むよりも、それを追いかけている日本とは何なのかを知ろうとした。

日本を理解するために、日本語の古典を読もうと志したとき、橋本進吉先生の教導を受けた。一点一画を重んじ、一字一音の差異に目を向ける研究から始まり、単語へ、文法へ、と私の目は広まり、日本語はこの言語と同系なのかという課題に引かれた。それが国学者のいう「儒仏以前の日

本」を明らかにする道である。

万葉集、日本書記、古事記、源氏物語と古典の注解に力を注いで、そこまでで私の研究の進路は終りかけていた。ところが偶然、「A Dravidian Etymological Dictionary」を手に入れた。眼界が開けた。

以来二十年、タミル人学者コダンダラマン教授、サンムガダス教授夫妻の協力を得て、タミルの古典サンガムの理解につとめた。それは私の日本語の古典の注釈を土台に、それと全く同じ手法で進められ、考古学や民族学に及んだ。

昨年の秋のセミナーで、タミル言語学の第一人者アゲステイアリンガム教授はその結果を「大野の挙例と説明によつて、この二言語は親族関係にあると確信した」と批評した。私は安心し、喜んだ。その後、井上靖文化賞の受賞である。私は仕合わせを感じる。

贈賞理由

日本語を究めようとすれば、根本的な問題として、誰もが起源説の問題にぶつかる。日本語はどこから来たのか。国語学を学ぶ者は一人一人此の問題を引き受けて血のにじむような努力をかさねるべきである。大野氏が学者として生涯を賭した、日本語とタミル語の強い類縁性の発見と、それを通じての日本語起源探求には、まだ決定的な凱歌はあがっていない。

しかし信念と自信をもって、着実な研究と検証を重ねて、未知なる研究への道をすすみ続ける潔さを、この賞を贈る理由とする。

国語学者・大野晋氏（略歴）

一九一九年・八月二十三日東京に生まれる。

一九四三年・東京帝国大学文学部卒業。

一九四七年・清泉女学院で教鞭をとる。

一九五二年・学習院大学助教授に就任。

一九五三年・『上代仮名遣の研究』を刊行。

一九五七〜六七年・『日本古典文学大系』（岩波書店）『万葉集』『日本書紀』の共編。

一九五八〜六〇・朝日新聞に『言葉の年輪』連載。

一九六〇年・学習院大学教授に就任。

一九七四年・共編『岩波古語辞典』を完成。

一九八〇年・月刊誌『言語』に「考証・日本語と

タミール語」を連載。

一九九〇年・芸術選奨文部大臣賞共同受賞。

一九九四年・『係り結びの研究』読売文学賞受賞。

一九九九年・『日本語練習帳』ミリオンセーラに。

主な著書に『日本語の文法を考える』『日本語以前』『仮名遣と上代語』『文法と語彙』『日本語とタミール語』『一語の辞典神』などがある。

選考委員（五十音順。敬称略）

大岡信 菅野昭正 平山郁夫 樋口隆康

井上靖文化賞とは

文学者井上靖を記念し、日本文化の向上に資するため、文学、美術、歴史等の分野において優れた業績をあげた人、または団体に贈賞である。

贈賞・年一回、賞状及び、澄川喜一氏の制作

になるブロンズ像の記念レリーフと

賞金、百万円を贈る。

これまでの贈賞者名

第一回 小澤征爾氏（音楽指揮者）

第二回 ドナルド・キーン氏（日本文学研究

第三回 陳舜臣氏（作家）

第四回 白土吾夫氏と日本中国文化交流協会

第五回 梅原猛氏（哲学者）

第六回 加山又造氏（日本画家

第七回 大野晋氏（国語学者）

第八回贈賞・平成十三年 一月二十五日

白川静氏に贈る

受賞の言葉

このたび井上靖文化賞を頂くことになって感銘に堪えない。字書の三部作を出してから賞を頂くことが多くなつたが独りで頂くのは初めてである。改めて重い責任が与えられたような思いである。

井上文学は、私にとっては、一代だけでも違うような感じがするが、じつさいは、私が三つ年下であるにすぎない。私がまだ十分な研究生活にも入らぬようなころに、井上文学はすでに鬱然たる

巨峰であつた。

しかしこの巨峰は私にとって近づきがたいものではなく、むしろ親しみを感じさせるものであつた。それは当時、私がよみ進めていた万葉の世界や、また中国古典の世界を扱われた作品が多かつたからであろう。

そしてそれらの諸篇は簡潔な筆致で、殊に詩情の豊かな作品となつている。しかも史実の把握は、史家のそれよりも明晰であるように思われた。『額田女王』はかの女をめぐる宮廷と、その作品の理

解の上には是非とも必要ようなものであらうと思
う。

私としての思い出は、氏の最後の作品が『孔子』
であるということである。

私はその十五年前に、ある感慨を以て『孔子伝』
を書いた。しかし、戦後の久しい生活と、それへ
の感慨が寄せられているような『孔子』に井上文
学のあり方がみえるように思われた。

受賞の規定には「今後一層の活躍が期待される
もの」と記されている。それは私にはすでに困難
なことであるが、私の著作集はなお別巻の刊行を
残している。

別巻は資料的なものであるが、後学の方には非
とも残しておきたい。それが受賞者としての私の
責務であらうと思う。

贈賞理由

白川静氏は、戦後日本の言語や漢字文化の受難の

時代に、漢字の起源について膨大精密な研究を続
けることにより、中国文化、東アジア一帯の文化
への深い関心を呼び起こした。文字は全ての知識
の根源である。その根源を求めべく、生涯をか
けて、独自の、体系的な、解読方法を樹立。その
業績に対して、この賞を贈る理由とする。

選考委員 (五十音順 敬称略)

大岡信 菅野昭正 樋口隆康 平山郁夫

漢字学者・白川静氏 (略歴)

一九一〇年・四月九日、福井県福井市に生まれる。

一九三四年・文部省教員検定試験に合格。

一九三五年・立命館中学教諭となる。

一九四一年・立命館大学法文学部漢文学科に入

学。

一九四三年・同大卒業。同大予科教授に就任。

一九五四〇八年・立命館大学教授を努める。

一九八四年・字源辞典『字統』を刊行。毎日出版

文化賞特別賞受賞。『字訓』を刊行。

一九九一年・菊池寛賞受賞。

一九九六年・漢和辞典『字通』刊行。朝日賞受賞。

一九九八年・文化功労賞者に選ばれる。

二〇〇〇年・『白川静著作集』全一二巻を刊行。

主な著書には『金文通訳』（五六冊）『説文新義』

（全一六巻）『稿本詩経研究』（全三巻）『詩経―

中国の古代歌謡』『中国の神話』『中国の古代文字』

『初期万葉論』『中国古代の民俗』『孔子伝』『漢

字』などがある。

吉原工業高校に碑が建立

——三十六年前の校歌作詞が縁となる——

平成十一年四月四日、静岡県立吉原工業高等学校（富士市比奈）において、新校舎の落成を記念して、井上靖の文学碑が建立された。

吉原工業高等学校と井上靖の縁は古く、昭和三十八年、井上靖は学校創立六年目にあたり、校歌を創りたいという学校側の希望を受けて、校歌を作詞している。

この作詞は、校歌として石に刻まれて学校の校庭に石に刻まれて置かれていた。

今回の碑の建立は、この校歌制定時の縁が切っ掛けとなって建てられた。当時、井上靖が学校関係者に贈っていた色紙が大事に保存されていて、今回の碑の言葉として使用されることになった。

色紙の文字はペンがきであったため、改めて、墨書したものを書き刻んである。

校歌のいきさつ

昭和三十六年一月二十六日、作詞を依頼。

昭和三十六年二月二十二日、五月十一日、翌三十七年十月十三日の三回、井上靖は作詞のためにこの学校を訪れている。

昭和三十七年十一月七日、作詞完成。井上靖の紹介で芥川也寸志に作曲を依頼していた。

昭和三十八年二月六日、作曲が完成。

昭和三十八年三月十二日、卒業式に歌われる。

昭和三十八年十一月十五日、校舎並びに斎藤記念館の落成式の際に、井上靖出席のもと校歌発表会と記念講演が行われた。

表会と記念講演が行われた。

碑文

「潮が満ちて来るや
うなそんな満たし
方で人は己が生涯
を何ものかで満た
すべきだ。」

井上 靖

校歌

冬はましろうく
夏は青き
富士の高嶺を
まなかに

井上 靖 作詞
芥川也寸志作曲

朝な夕なに仰ぎつつ

努力の道を行くわれら

比奈の丘辺に沸く雲の

野の花よりも美しければ

礼と技術を修めんと

希望に燃えて若き子が

こゝ学舎に集うなり

あゝ吉原工業高校

春はゆたけく

秋は冴ゆる

駿河の海を

指顧のうち

ゆうべゆうべに眺めつゝ

努力の道をゆくわれら

比奈の丘辺にわたる風

時勢の榮華超えたれば

新しき世の礎石とて

大志を胸に若き子が

こゝ学び舎に集うなり

あゝ吉原工業高校

井上靖文学碑 「流星の碑」に寄せて

井 口 哲 郎

「流星の碑」については、『伝書鳩』創刊第一号の「全国の井上靖文学碑の一覧」に「二四、石川近代文学館横の碑」とある。詩集『北国』所収「流星」を基にした碑文につづいて、「井上靖の卒業した四高校舎が文学館に使われている縁で、四高開学百年祭開催の記念として建てた碑。小説『北の海』の舞台」と説明がついている。

井上靖文学碑のなかで、二十四番目に建てられたもののようであるが、石川県では、左記に「十二、内灘の碑」がある。

井上靖文学碑は、井上靖や井上文学に深いかかわり

がある土地に、それに思いを寄せる人たちによって建てられる。そこには、それぞれの思い入れがある。う。それにしても、「流星の碑」は、石川近代文学館にとつて、単なる記念碑・顕彰碑ではないのである。

当時の「建設趣意書」を見ると、「昭和六十一年秋を期し、重要文化財第四高等学校の校舎をあげて財団法人石川近代文学館として装いも新たに開館の予定であります。——文学館の飛躍的拡大の開館を記念し、更に、おりから旧第四高等学校が開学百年祭を迎えることを併せ記念して、中央公園の一隅に『青春の町』金沢のシンボルともいふべき『井上靖文学碑』の建設

を計画しました」とある。そして、その発起人には、当時の県知事、金沢市長をはじめ、経済・教育界、文学・四高関係を代表する人々の名前が並んでいる。まさに県・市をあげての事業だったのである。

昭和六十年六月の北國新聞に「井上靖氏が自ら碑文」という見出しで、文学碑建設委員会の発足を報道している。記事の中に「碑文は、当初、井上氏が四高時代に内灘砂丘をうたった詩集『北国』所収の「流星」を予定していたが、『建立時点にふさわしい一文に』と、同氏がこの夏、精根こめて練りあげた」とある。そこから、この碑に対する井上靖自身の思い入れもうかがえる。なお「製作にはわが国彫刻界の大家の一人、舟越保武氏があたる」ことが記されているが、これには昭和五十九年十一月建立の「山本健吉文学碑」とのかわりがあったと思われる。その製作も舟越保武で、井上靖が撰文を寄せた。

彼の日々は柔道着で、無声堂の道場に明け暮れた。

やがてわが青春を律したものの決別の時が来た。心虚ろなるまに、北海の砂丘に身を横たえ、天上の星の流れに驚嘆、その存在の悠久にわが心の孤獨を重ねた。その時忽然として身内に湧き出て、その魂をとくとくと充たしたものの、それは星のやうに清冽にして芳醇の詩であつた。

半世紀前の、詩神誕生の神話。その学生の名は、井上靖。同窓、有志、相図り、縁のこの地に永くその名を留める。

昭和丙寅十月

山本健吉

一人の四高生があつた。三年間

(原文のまま)

詩人の心詩人ぞ知るといった名文である。

ちなみに、石川近代文学館には、父石橋忍月と並んで、山本健吉の展示コーナーがある。母君は加賀藩前田家の家老横山氏の一族で、山本健吉も石川ゆかりの文学者である。

昭和六十一年十月二十五日、石川近代文学館新装開館式と井上靖文学碑除幕式が引き続いて挙行された。

それには展示作家やその関係者など多くの人々の参加があった。しかしその中には、井上靖の姿はなかった。

当日、「体調不調のため」とだけ伝え聞いている。

(当日の参加者などについては『伝書鳩』二号に新保千代子前館長の寄稿文があるので、重複を避ける。)

井上靖の文学の出版は、詩であった。私の畏敬する作家秦恒平は、東京工業大学教授時代、授業の最初に必ず井上靖の詩を朗読した、と私に語った。その四年間、彼はいったいどんな詩を選んだのか、機会があったら聞いてみたいと思っている。

私は、井上作品をそんなに深く読んでいるとはいえ

ない。ただ、読んでいつも感じるのには、文体の透明感である。井上文学の研究者や愛読者からお叱りを受けられるかもしれないが、詩にも小説にも、評論文にまでもそれを感じる。読んでいるといつのまにか表現の手段である「ことば」が消えて、作者の心がじかに伝わってくるような気がするのである。私はこの読み方に自己満足している。

(石川近代文学館館長)

「井上靖展」を見て

平成十二年四月二十九日から六月十一日までの期間、東京都世田谷区南鳥山にある世田谷文学館で「井上靖展」が開催されていた。

会場には井上靖生涯の業績が、分かり易く展示されていた。

今回の井上靖展では、開催直前に井上家の書庫から見つけ出された、習作時代の「未発表原稿」二十二本が並べられて、話題になっていた。

子供時代から、父親の留守をねらっては書斎の奥の書庫に入つて中を触りまわしていたので、私は、この原稿のことは知っていた。はじめて読んだ時の印象を言えば、なんだか父親の古い日記でも覗いたような感じだった。父はこういった物を大切に生涯持ち続けてきたくせに、これらについて、あまり触れたことがない。もしかすると、内容を忘れていたのかもしれない。

娘の私は親の人生の前半分を何も知らない。そこでそれらの作品は知らない時間の向こう側から引き出されてはいるものの、現在の父親とは無関係な作品にみえていた。同じ物を読んでも、研究

者の場合は、その存在の意義がわかり、解説が出来る。

「非常におもしろいですよ。こんなにはば広く色々のタイプの物を書ける作家は他にあまり居ません。これをみると、井上靖はなんでも書いてしまったんですね。自分でもどの方向に行こうかと書きながら、探していたのではないでしょうか」とのことだ。

父自身が、公に自作としての価値を認めていた作品ではないことを考慮してなのであろう。展示棚では並べてあつても、中を全部読めるように置いていない。なにげない配置ひとつにしても、展示をする専門家にはしっかりとした基準があるものなのだ、気がつかされた文学展であった。

父の没後すぐに編集が始まり、先頃やつと完成した「井上靖全集」(新潮社)を取り出して、作家出発以前のごく初期の頃の作品を読み直してみた。内部に押さえようもない才能を秘めた若い青年の姿が浮かんで、そんな頃の父の傍らに居たかったものだと、末っ子に生まれたことを残念に感じたものだ。

(黒田佳子・記)

書き留めたことを雑然と

安藤尊夫

井上靖との交流記録

昭和三十二年・九月三十日 井上靖より狩野川台風の

災害見舞い。電報と見舞金拝受。

昭和三十四年・五月十日 靖より隼雄没の電報来る。

昭和三十五年・七月十八日 吉原工業高校校歌の作詞

を頼みに世田谷のお宅を訪問。先生がオリンピック取材に欧州に出かけるなどということ知らなかったの
で、この日も、何時ものように何んの連絡もしないで、
暢気にお尋ねした。出発する前々日であった。

「『ある落日』の原稿を新聞社へ渡して旅立ちたいのだが、多忙で行き詰まってしまった」と言って、先生は書齋の縁側に腰を掛けて庭を眺めていた。

こちらは、返事だけでも良い返事を頂かないと、気をもんだ。何故なら、この話を吉原工業高校の中村校長先生が最初に持ってきたときに、私では駄目だから、井上先生の友達が沼津にも吉原にも富士にも居られるから、その方々にお願ひしては如何ですかと、お断りした。中村先生は「私は最初から安藤さんにお願ひしようと思ったのですから他の方々のことは考えて

居りません」との固い気持ちなので、ついに引き受けてお願いに来たことを申し上げた。先生は、「欧州より帰国したら、早速学校を訪ね、先生方と話をしよう」と心快く承諾してくれた。中村校長さんも喜ぶことだろう。私の面目も立つ。有難いことだ。

昭和三十六年・一月二十六日 中村校長、渡辺康夫教頭を案内して改めて正式な依頼に井上宅を訪問する。

先生は「六、七月の中国訪問前に作詞したい。その前に一度学校の周辺の様子を見ておきたい。二月二十日の吉原ダルマ市を見物してから高校に取材に行く」との話である。「私は父の頼みで修善寺工業高校の校歌を作りましたが、あと、学校の作詞は全部お断りしました。これは尊夫さんからの頼みであるから作詞します。少し時間がかかりますが」と申されていた。

校長帰宅後、私はひとり残つて、先生と井上隼雄の墓碑建立について話す。二月十五日に葦山温泉「水宝閣」に一泊を予定、翌十六日に田京の石工を呼び、墓の相談をすることに決めてから、帰宅する。

二月十六日 靖、森田達（靖実弟）、私の会社に寄る。

石屋の殿村とで西平の熊野山墓地に登る。石碑の寸法は井上潔の石碑より一分短いもの、周辺の石垣は低いもの、と決める。先生は鎌倉の東慶寺の文士の墓の話をして、簡素な墓が良いと言っていた。三月二十日まで隼雄の墓碑銘の原稿を書くという約束になる。

四月一日 原稿が遅れ、五日迄には書くと言つて電話。

四月十六日 殿村石工より、三島の書家土屋氏に戒名を書いて貰い、それを刻んでいる。二日位で仕上がるから原稿を急いでくれとのこと。その旨東京に電話。

昭和四十五年・六月八日 靖静岡中央図書館で講演。

昭和四十五年・三月三十一日 葦山小学校で靖の講演。講演が終わるまで、邦子がおくさん、佳子さんを多田岩城和太郎氏の葎ハウスに案内。その後、大仁町御室の子育地藏、益山観音堂にのぼる。登り口一丁目にて写真をとり、改めて観音堂の楓、銀杏の大木を見ようということになり、この日は途中で引き上げる。

五月一日 井上夫婦と子供、孫、一家中にて苺狩。子

育地藏、益山観音堂へ登り、昼食を広場で取り、夕方まで遊ぶ。この狩狩りは雑誌『すばる』の創刊号の「桃梨記」に、益山観音堂は『樺の木』に書かれて発表。

十月二十五日 邦子、宏道をつれ井上宅訪問。

十二月三十一日 暮れの挨拶のため井上家訪問。いつも通り土産に金山寺味噌と甘酒持参。先生は書庫を大掃除中。画帳『北国』『獵銃』（非売品）を頂く。

昭和四十八年・二月十八日 『しろばんば』補正中につき、井上潔の略歴を調べてくれ、と頼まれる。墓碑銘の履歴をもとに資料を送ると伝える。早速、葦山江川家へ行き、潔の葦山県医ム局長時代の給料等の書類を写真にとる。

昭和五十一年・十月 下田沖で友人の釣った黒鯛を土産に世田谷に行ったところ、文化勲章授与の内示に役人が来ていた、とのことだった。「これが本当の目出鯛だね」と先生がよろこんでくれた。

十一月十五日 文化勲章受章の祝賀会を湯ヶ島にて行う。町挙げての会ゆえ石川明、静子さんも会場へ支度

に行くから、尊夫さんは兄（靖）と二人で墓参りを一緒にしてくれと前日に頼まれていた。静子さんは私たちが熊野山に出かけてから、家の戸締まりをして、役場の会場に向かうと言う。

当日先生は多忙にて、朝東京を発ち、一人で向かうというので、湯ヶ島の井上宅にて待つ。十時頃先生来る。奥座敷でお茶を飲み、先ず勲章を見せて貰う。静子さん勲章を首に掛ける。尊夫さんも掛けてみるというので、私も掛けて貰う。気持の良いものだ。

先生が花と線香を、私が水を下げて二人で熊野山に登る。勲章を掛け拜墓。先祖に受賞を報告し下山。祝賀会は二時半より開始。三時十五分会場を後にして、亡父隼雄の実家の石渡家を訪問して墓参。

先生は四時までに沼津にいく予定。長岡温泉街から只野を経て、お成橋の料亭前で別れる。「先祖を大事にしない家は滅びるね。受賞を先祖に報告するまでは落ち着かない気持ちでした。今日は一緒に墓参りをしてくれて有り難う」と丁寧に頭を下げてくれた。

私にとつては最高の日だった。

昭和五十七年・十月十七日 滋賀県渡岸寺の『慈眼秋

風湖北の寺』除幕式参列する。

昭和五十八年・五月一日 息子宏道、美保の結婚式に

は中国訪問のため出席できないから、二人をつれて上京するようにと先生より電話あつたので二人を連れて訪問した。桜花が用意してあり、先生夫婦で迎えてくれた。孔子の話、足立文太郎が友人の借金保証の印を押して一生苦労した話、両親を大切にしないのでその人の人格が決まる、などの話をしてくれる。中国明時代の小皿を美保にくれる。

六月十九日 滑沢溪谷『獵銃』碑の隣に山本健吉氏の

副碑の除幕式に出席。「昭和の森」に井上家移築の記念行事あり。井上邸前にて写真を撮る。正規、靖、鈴木之夫、尊夫。

昭和六十年・三月三十一日 大東町『松本亀次郎』碑

の除幕式。野上弥生子氏の悔やみは奥さんが代理。三島駅でふみ・靖が待合せ。墓参した後、門野原の石渡

盛雄法要祭へ参列。墓参の折り安藤家に来宅。

昭和六十一年・八月二日 靖夫婦が墓参。白壁荘泊。

昭和六十三年・四月二十八日 シルク・ロード博開催

の折り、奈良ホテル滞在中の井上靖夫妻を長谷川茂氏と共に尋ねる。

昭和六十三年・十二月三十一日 美和さんと年末挨拶

に世田谷訪問。詩集『傍観者』に御題車の救援の短歌を書いて貰う。

蘭学医・井上潔のこと

井上家には靖の曾祖父・井上潔が医学を学びに長崎に留学した話が伝わっている。「長崎で大変苦労して医学を勉強したと祖母ふきから聞いたことがある」と、月ヶ瀬の医師月出勉も話している（ふきは潔の姪で月出家に入嫁）。私はそれを井上先生の家族文集『まるいテーブル』二号に記しておいた。

しかし、井上家には留学を証明するものは何も残っていない。「隼雄の指図で井上家の蔵（靖が幼児期に

祖母と住んだ蔵)の物を、だいぶ焼いてしまったことがある。書籍などは焼かなかつた」と靖先生の義弟、石川明さんが話していた。手紙類や日記類を焼いてしまつて後悔しているとのこと。残つていれば留学について何か手掛かりが分かつたかもしれないのだが。

私自身は潔が長崎に留学したと思つている。明治三十四年一月に亡くなつた潔の墓碑には「萬延元年、松本順の門に入り、薬学を修得するため、長年非常な苦勞をし、後、臨床技術を修練した」と刻まれている。

松本順(良順)は長崎でポンペに医を教習した蘭学医である。その経歴を調べてみると、ちょうど潔が入門した頃、順自身が長崎で留学の最中になるからだ。

松本順・『順天堂史』より調べる

●安政四年(一八五七)八月・オランダ軍医ポンペが長崎に來任。長崎に着いた時には、江戸から数名の學生が彼から医学を学ぶ為、派遣されていた。その監督に当たつたのが松本良順。彼らがオランダ人に修学

するについては旧守派の反対もあり、妨害を避けるために、良順自身も海軍伝習生の名目で長崎に下つてゐる。医学伝習者は表向き良順一名であつたので、そのほかは助手の名義で陪臣町医、三十四名を陪席聴講させることにした。

●安政四年(一八五七)九月二十六日から十一月十五日迄、長崎奉行西役所で開講した。ここでポンペの指導を受けたと推定されるものは一三三名にのぼる。(沼田次郎『幕末洋学史』より)。

良順は長崎奉行を説いて病院を設立し、これを養生所と称した。ポンペはここで講義診察をした。西洋人が教師となつて正規の医学伝習を行ったのはこの養生所が初めてである。

【萬延元年(一八六〇)、潔十八歳良順の門に入る。】

●文久元年(一八六一)五月頃、我が国最初の公立病院小島病院(後に精得館と改称)を建て、ポンペが医院長に、良順が副医院長になり、患者を治療する傍ら門下生とともにポンペの講義を聴き伝習する。

●文久二年（一八六二）良順江戸に帰り、八月四日西洋医学所頭取助となつてゐる。

また、井上潔は三島の養和病院院長など務めてい
なかつたという説があるが、『葦山町史』七巻、明治
十二年十一月十四日十五日の『函右日報』に「井上養
和病院長」の名前が確かに載つてゐる。

潔の墓碑銘を書いた山口 は、潔が勤めた三島の養
和病院の建立に關しての記録に名が記され、病院の建
物も寄付してゐる人物である。

潔の勤めた「医局長」「医務取締」等の職名を考え
て病院の運営組織上、書類提出など想像しても、二人
は当然知り合ひの關係にあつたと考えられる。このよ
うな人が書いた墓碑銘ならば、潔の経歴などに、それ
ほど大きな間違いを書かないのではないか。

井上潔・医家存続に執念

潔の兄玄達は、江戸で修行中病に罹り、若くして没

してゐる。医家に生まれた玄達の修行と言へば、当然
医の修行とみて間違ひなからう。

潔（天保十四く十五年生）は、沼津藩水野家の家老
職五十川忍の妹、ひろ（嘉永元年一月十五日生）を妻
に迎えるが、子に恵まれず、妾のかのにも子は恵まれ
ない。養子の文次も医業をつがなかつた。しかし、玄
春、俊達、元俊 玄碩（潔）と続いた医家を絶やすこ
とができない。

潔の妹すがは市山の足立長造に嫁ぎ、文太郎、秋作、
ふきの三人の子を儲けた。後にすがは長造と離縁して、
長男文太郎をつれて井上家にもどる。文太郎の養育を
兄潔に頼み、片浜村東間門士族、林四郎と再婚。すが
は、林家で兵馬、武、種の三人の子をもうけた。

跡取りのない潔は、この林兵馬を養子にするが十七
歳で夭折。ついで林武を二男として入籍するが、やは
り十七歳で亡くなつてしまつた。

妹すがの長男・足立文太郎を預かつて医学校にいれ
たのも、医家大事との思ひであつたらう。潔は石渡秀

雄を通じて渡辺円蔵より文太郎の学費三百円也を借りている。足立文太郎の渡辺円蔵への借金のお礼と、留学したドイツより帰国の挨拶の手紙が残っている。

しかし、足立文太郎は潔に世話になり医学の道を進んだが、開業医としての井上家は継がず、研究医として大学に残る道を選び、後に世界的にその偉業を認められる解剖学者・足立文太郎となった。こうして潔の医家存続の願いはたちきられてしまっていた。

潔には子もなく正当な位置もない妾かの将来が気になつていたのである。強引に分家を立ててかのに継がせ、明治二十四年四月十八日、本家養子の長女やえをかこの養女にした。

隼雄は明治十三年五月二十五日、門野原石渡秀雄の二男として生まれた。学校の成績の良かった隼雄は、潔に乞われて医者になることを約し明治二十九年十月十八日隼雄十七歳の時に、井上かこの養子として入籍。

明治三十六年三月十八日、隼雄（二十三歳）は井上やえ（十九歳）と婚姻した。

こうしてかこのために、潔は全ての問題の解決を計つたのであろう。そこに長男として生まれたのが靖であり、靖の妻となつたのが、足立文太郎の長女ふみである。

これほどに潔が苦勞して次代に繋いだ医家であるが、軍医となつた養子隼雄の長男靖は医業をつがずに文学の道に進んだため、結局医家としての井上家は絶たれることになった。

井上隼雄の思い出

昭和六年の春、陸軍軍医少将の軍服に勲三等の旭日章を首に吊した軍人が、新宿の隠居所を尋ねてきた。

家族共々の四人ぐらいであつたと思う。祖父為吉が応対に出ていた。祖母多和の弟に偉い軍人がいるということは聞いていたが、その弟井上隼雄と知つて驚いた。祖父母は弘前の桜を見て帰郷するという手紙を受け取つていて、その来訪はとうに知つていたという。

その手紙は今、大事に取つて私の手元にある。

退役して湯ヶ島に隠居するので家を改築したい、大工や材料のこともあるので、近く宿（地名）の家へ遊びながら相談にきて貰いたいと話して帰った。以来、閑があると宿の家をたずねた。いつも喜んで迎えてくれる隼雄伯父さんとやえ伯母さんがうれしかった。

応接間と自室、寝間の三室と台所の改築をした。南側の庭にあつた築山は取り除き、ひろびろとしたので、日差しが本屋の座敷へ入る明るい家になった。この時、私の家から白梅の古木を一本庭に移した。南の庭に入つて最初の梅の木である。後に靖先生が天城屋から田圃を買つて芝庭を造つたが、そのときも私の家から梅の老木三本と楓の木を移植した。が、梅の木一本は枯れてしまった。隼雄伯父は手入れた甲斐があつたと言つて、私が尋ねると早速沓脱ぎへ履きものを揃えさせてくれた。履物を揃えるやえ伯母さんに気の毒であつた。

「牡丹の大輪の咲きかけの蕾が二十くらいある。今年は百くらい咲く」と嬉しい笑顔の伯父である。細め

る眼は門野原の盛雄伯父や、私の父の重宣によく似ている。慈愛の眼であつた。

隼雄の兄盛雄は湯ヶ島小学校校長を最後に、教職から身を退き、文字通り悠々自適の生活をしていた。「洋堂龍骨、独醒書屋主人」という号を持ち、漢詩や俳句を作つていた。盛雄は昭和二十四年に八十三歳で没。

盛雄、多和、隼雄、の父秀雄は大正五年、孫の靖九歳のときに七十四歳で没。「しろばんば」のなかで、主人公が、祖父の椎茸栽培方法を研究して教えている伝授所に訪ねていったのは小学五年の時とさせているが、これは小説の効果上のことで、事実とは異なっている、靖が語っている。

美味 求 具 （軽井沢にて）

昭和四十七年六月の頃、軽井沢にある井上先生の別荘に招待してくれる話があつた。先生が湯ヶ島に来る度にいつも集まる小学校時代の友人や、「しろばんばの会」の会長など、との意向であつたので話しは急に

進んだ。同行者は天城屋の浅田幸衛、紙屋の浅田忠治、亀貝長太郎、椎茸屋丸川の鈴木之夫、月ヶ瀬に開業している親戚の月出医師、靖の妹の静子さんの主人、石川明、私、安藤尊夫と八名と決まった。

七月十六日軽井沢に到着。当日天平様式の丸柱の濡れ縁で紅茶を飲みながら、先生と一時を過ごした。

五歳の孫の朋子がミカンを食べながら「酸っぱいけれど甘い」と言ったと、子供の舌で感じる味覚の確かさについて話をしていた。先生は義理の祖母おかのおばあさんから食べさせられた金山寺味噌を今でも美味しと感じる。このように幼いころの思い出の味が一番美味しい味なのかも知れない、此の味を孫に食べさせたら何んと言うか聞いてみたいと言っていた。後日、先生は「幼き日のこと」の中で、私の祖母、間宮の祖母、私の妻邦子の金山寺味噌の話にふれている。

毎年正月二日が私の年始で、先生の母であるやえ伯母さんは正月用にと牛の舌を長時間茹でたものをいつも出してくれた。隼雄伯父と一緒にこれを食べたのも

思い出の一つである。

軽井沢では「ホシノ」という旅館にとまり、翌日鬼押出し、小諸城址を見学。夕食に中華料理をご馳走になって、初めて、海の絶壁に海藻と燕の唾で作られたという「海燕の巣」の料理をたべた。

軽井沢から帰って十月十一日ころ、お礼をかねて世田谷に伺った時、隼雄伯父の兄弟姉妹の家の屋号を教えると言われてしらせると、それも「幼き日のこと」に書かれていた。

熊野山のこと

隼雄伯父三回忌には先生に頼まれて、田京の殿守石屋を連れて、先生と三人で隼雄伯父の墓石建立の下見に墓地へ行った。

隼雄伯父の略歴は靖先生が書くことになっていたのになかなか原稿が出来ないので、石屋さんとはらはらして待ったものだ。

墓石建立以来、お盆がくると夕食に招かれ、翌日は

お墓詣りに一緒するのが慣例となった。彼岸の前、お盆の前の墓掃除は私の勤めと思い、毎年二回は熊野山に登っている。

この熊野山に建った井上靖の忠魂碑、「魂魄飛びてここ美しきふるさとに帰る」の除幕式の日のことも思い出す。

式が終わると、先生の講演会の支度と雨模様のために、参列者は早々に急いで山を下りた。先生と妹の石川静子さんと私と三人で、隼雄とやえ、ご先祖の墓詣りを済ませ、碑の前まで来ると、NHKの写真班の二人が息を切らせてやってきた。熊野山を間違えて青羽根の龍仙山へと登ってしまい遅れてしまったことをしきりに先生に詫びていた。

折角来てくれたのだからと三人で碑の前に立った。小雨が降り出したので、コウモリを先生にさしかけての録画撮りであった。

平成五年一月二十三日に、井上靖峯雲院文華法徳日靖居士の三回忌を雲金の妙本寺にて十時半から十一時

三十五分の間法要を営む。法要を済ませても靖先生の思い出はつきない。それが肉親かもしれない。

先生の命日は一月二十九日であるが、その日は町で法要の行事があるから、井上家の身内としては二十三日にごく身内のものですませようということになったものだ。あと、熊野山の墓処に詣でる。別所に眠る父母の墓詣りをした。

熊野山は隼雄伯父、やえ伯母の思い出、今は靖先生の思い出、そして私の曾祖父父母弥右衛門、うら、祖母の為吉と多和、父母重宣、百代と二人の弟の思い出がいつばい詰まっている村の墓山である。

小学生のころ間違えて教師に土を投げ、罰として熊野山へ駆け足で登らされたことを思い出す。息切れはするし、足は動かさず途中でへたばって座り込んだ道であった。

熊野山の思い出はつきない。

(井上靖の親類・地域の考古学研究者)

理事長時代の井上先生

―つけたし、井上靖全集のことなど―

井 口 一 男

一九六九年四月、井上先生は日本文藝家協会の理事長に就任された。一九五六年、丹羽文雄氏が石川達三氏のあとをうけて理事長となり、六六年には会長に推挙され会長・理事長を兼務、新しい理事長の選出が望まれていた。井上先生は選任後間もなく開かれた定時総会で「多少でも協会に尽くすことができるとすれば、ここ二、三年をおいて他にはないので、理事長をお受けした」と述べ、天命のような自然さで就任された。

しかし先生の理事長在任期間は短く、七〇年五月に再任され、その任期終了の七二年五月には再選を辞され、丹羽氏が理事長に返り咲いた。井上先生の理事長在任は約三年間であつた。

井上先生の理事長在任時代の協会の仕事としてはまず最初に、原稿料問題について協会内に原稿料対策委員会を設け、出版社に申し入れを行つたり、機関誌「文藝家協会ニュース」で特集を行い、世論を喚起したこ

などがあげられる。

また現存作家の書簡が、古書店、古書市で売買されることについての関係者への抗議活動、当時準備が進められていた全日本ブッククラブとの印税率の覚書締結、最高裁でのサド判決に対する反対声明発表などをおこなった。

協会内のことでは理事のうちの一定数を、会員の郵送による直接投票で選ぶのが始まったのは井上理事長時代からである。

また協会の編纂物のうち現代小説のアンソロジーである『現代の小説』も、井上先生が理事に在任中、三一書房からかつての『創作代表選集』のように年二回刊で創刊された。

井上先生在任中の協会の最も大きなイベントのひとつは、「文学者之墓」の除幕式である。「文学者之墓」は経済上の理由などで、墓を持ってない会員遺族のために共同の墓が持てたらうれしい、という理事会での丹羽氏の発言がきっかけとなり、さまざまな紆余曲折の

「上具体化したもので、井上先生も理事長就任以来、出版社への寄付要請や、建設現場での「縄張り」にでむかれた。

「文学者之墓」はその当初の趣意のように納骨して墓所とされるのを基本とする一方、墓所の性格を持った共同の文学碑としても受け止められている。

一九六九年十一月六日、会員ご遺族を始め、丹羽会長、井上理事長、書籍出版協会野間省一会長、設計者の谷口吉郎博士らが参列して富士山の麓「富士霊園」内の「文学者之墓」の墓前で除幕式が開催された。

「文学者之墓」と刻まれた主墓碑の他、一メートルほどの高さの屏風状の碑壁を設け、葬られた作家の氏名、代表作品名、没年月日、享年が一人一行づつで記されている。

当初一連であったこの碑壁も一九九九年には七連目が作られた。井上先生は九三年五月に六連目の筆頭に刻まれた。代表作品名は「狼銃」である。

このような代表者としてのお仕事とともに、協会で

の活動で忘れられないのは、税対策に対して示された熱意である。協会では戦後の再建以来ほぼ毎年、国税の当局者と懇談をおこなっている。人は誰も「最少の経費で最大の効果をあげることを目指す」筈だとする経済原則によつて構築された税制とその運用の中で、作家は収入額が源泉徴収制度で明白であるのに対し、その「収入を得るための」必要経費額の算出がいかに困難であるかを、井上先生は会合の度ごとに（いづれかの）自作品『川の話』をあげて、心こまやかに説明された。その語り口を、夜が更けて行くとともに境に入つて行く先生の書齋での、孔子の話をされるご様子とともに忘れることが出来ない。

『井上靖全集』が第二八巻まで刊行され、あと一卷を残すのみとなった。最終巻の刊行が待たれる一方、充分時間をかけて充実したものを出して欲しいとも思う。

この全集の編者の英断は「詩・短編、エッセイは網

羅するかわりに、長編の一部は割愛」したことである。

「便宜上」四百字詰め一五〇枚以上を長編とし、（長編）の定義の希有な実例である）、井上氏の長編は七四編となり、うち四三編を収録したという。編数からいうと、「一部」という語感にそぐわないが、何を入れ、何を入れないかは編者の鼎の軽重が問われるところで、どのような編集をしても批判を免れることは出来ない。

今回の編集で収録されなかった作品は、初期の新聞小説、婦人雑誌掲載の作品の他、「朱い門」「波濤」「ある落日」「河口」「群舞」「遠い海」「盛装」「燭台」「花壇」「異国の星」等である。「異国の星」は長さの点や、題材がエッセイで語られているものが多いという理由によるものだろうが、先生の最後の新聞小説であるだけに全集から外されたことは残念である。

そのことに関連して言えば、明治、大正、昭和（戦前）の作家のそれぞれの作品を網羅するために開発された「全集」のスタイル、システムが、大衆文化状況

をふまえての活動が中心である戦後の作家の業績を記録、保存するために必ずしも有効に作用していないのではないかと思われる。ざつくばらんにいえば、新聞小説を全集に収めるとまず造本上の構えが重すぎ、更に会話の多用と掲載時の紙面に合わせた改行は、字詰めと行数の多い全集では余白が目立つ。井上先生の全集の他、最近通読した水上勉、立原正秋、永井路子各氏らの全集でも同じ思いをした。

文学全集全盛の頃、先生の作品はざつと四〇程の文学全集に収録されたが、「風林火山」「天平の甕」「淀どの日記」「敦煌」「しろばんば」等に人氣が集中し、時期的に収録可能と見られる「ある落日」「渦」「崖」「化石」「星と祭」などは収録される機会に乏しかった。作品にも運不運は避けがたいものかもしれない。先人たちは祖父や父や兄や姉、伯父や叔父、友人、知人たちが所蔵する個人全集や、文学全集類を読み、文学に開眼した思い出を多く語っている。時間や場所を離れても文学的遺産は生き続けた。現代の住宅

事情はそのような幸せな出会いを困難にしている。

『井上靖全集』の発行部数はあまり大きいものではないとのことである。その一つの理由にそうした事情があるのかもしれない。

一九九九年記

(もと文芸家協会勤務)

晩夏

井上靖

立退き命令の紙片を受けとつた別荘から、人々は順番に引き上げて行く。釘付けにされ梱包された空家が、日一日白樺の林の中にふえて行く。空家は灯を失つた替りに、己が心を取り戻す。空家と空家とは人氣のない林の中で、もうこつそりと囁きを交し始めている。

やがて何番目かの颱風が夏だけの商店街を水洗いし、石鹼をつけてごしごしこすり、その上に消毒剤を振りかける。カレンダーがめくられるように空がめくられる。青く澄んだ空がゴールド・ラッシュの飢餓の街の上にひろがる

立退き命令のまだ来ない画家と哲学者が、林の中の小さな十字路で、お互いに浮かない顔で、憂国について、あるいはまた流離について立ち話をしている。首輪のついた野良犬が何匹か胡散臭い二人の人物を監視している。

私の備忘録より

——平成十年度〜十二年度

浦城いくよ

私に関わった井上靖関係の行事などについて報告します。

平成十年度

四月一日〜五日

鳥取県米子市にある「アジア博物館・井上靖記念館」へ。この記念館は日本海の松林の中に建っている。井上靖記念館の他にペルシャ錦の世界三大コレクシヨンの一つである「アナビアン・コレクシヨンの展示館やモンゴル館、浜がすりで有名な地域がらかすり館などがある。いつ行っても広い庭が庶民的で親しみやすくホッとする。友の会の会報「海鳴り」の編集会議にも参加する。

四日 井上靖記念館の展示がこれで良いのか気に

なっていたので財団より小山乃り子さんに来館していただいた折展示のチェックをしてもらった。
丁度良い機会なので一部の展示替えなども手伝ってもらおう。

大勢の来館者に見ていただくためには、念には念を入れ、しっかりとした展示をしなければいけないと念じているが、思っていたよりずっと良かったという評にうれしく思う。

四日〜五日 夕方鳥取県日南町へ。小山さんと日南邑の宿泊施設に泊まる。日南町は中国山脈に囲まれ、戦争中家族が疎開していた所（当時は村）です。小高い峠の上に建てられた総檜の六角形の館を「野明の館」と父が命名。町立の無人の文学館（昭和六十二年開館）です。敷地内に建てられ

た碑の碑文で父はこの辺りのことを「天体の植民地」と言っています。町の文化センターの中に軽井沢の山荘の書斎を模した展示室が作られており、見学。父が生きていたころから知り合いの矢野町長、七瀬英夫さんが迎えてくださった。

四月二十七日 財団誌「伝書鳩」の原稿「私の備忘録―平成九年度」を書き上げ、ポストする。

五月十四日 日本文芸家協会の懇親会に母のお供で出席。東京會館「ローズルーム」にて午後六時より。母は長寿会員ということで二十人の方々と一緒に記念品としてひざ掛け毛布をいただき、代表三名の一人として壇上で挨拶。

五月二十六日 三岸節子展（三越本店七階ギャラリーにて開催）のオープニング・レセプションに出席。九十三歳の先生はご欠席で子供さん達が出られた。いつものように赤を使った力強い絵が沢山並ぶ。父は晩年、戴いて応接間に飾ってある力強く描かれた赤いバラの絵を見て「命をもらったようだ」と言っていた。

平成元年の三岸節子展の時は先生も父もまだ元気で母や私も加わり、会場で皆で写真を撮ったことを思い出す。先生は挨拶の中で百二十歳まで生きて絵を描きたいと云っておられた。

五月二十八日 並河萬里写真展「神秘の形象イス

ファハン」（大丸東京店大丸ミュージアムにて開催）のオープニング・レセプションに母と出席。

並河氏は半世紀にわたってシルクロードを中心に世界各地の遺跡や建築を撮り続けておられる。

イランの都市イスファハンの作品を集めた写真展。一九五六年から一九九七年まで六回行かれ、その間内乱、革命、さらに戦争が繰り返された。

父は氏の著書「シルクロード文明」（一九七二年刊）には推薦文を、「シルクロード・砂に埋もれた遺産」（一九七四年刊）と「シルクロード」（一九七六年刊）には序文を書いている。

六月四日 旭川市立井上靖記念館の相談役会（クラブ関東で十二時より）に出席。後藤典亨教育長、古田辰雄館長、清水節男氏、高野昭氏と。創立五周年の記念講演会の講師の人選について相談を受ける。またこの館の設立の出発点になった井上靖の著書「幼き日のこと」を記念館で販売してはどうかなどの話を出す。

六月十五日 井上靖記念文化財団の理事評議員会（山の上ホテル本館「つつじ」の間、三時〜四時半）に出席。平成九年度の事業報告、収支決算、平成十年度の事業計画、収支予算について審議さ

れた。会の終わった後、低金利政策で財団の財政が非常に厳しくなっているので井上一族で協力して寄付をすることにした。

六月三十日 「井上靖記念室」のある滋賀県高月町立図書館館長の明定義人氏が井上宅へ。「井上靖の撮ったイラン一九七三」の写真展のネガの返却に来られる。昨年以來久しぶり。近況など伺う。八月二十四日 「海鳴り」の原稿書き上げポストする。

九月一日～二日 「アジア博物館井上靖記念館」の横地治男理事長から隠岐の島に古くから伝わる牛突きの全国大会に米子の会会長、ご夫妻たちと招待される。山の中腹で行われた素朴で古式豊かな大会に感動した。

九月七日 青梅市にある吉川英治記念館にて吉川英治忌。雨の一日だった。小山乃り子さんを誘い出席する。小山さんは昔出版社に勤めておられ、当時吉川ご夫妻とも親しく、久しぶりにお会いした吉川夫人のお喜びは大変なものだった。昨年同様先生が「新平家物語」をはじめ数々の小説を執筆されたお部屋が開放されていた。特別展示は「神州天馬俠」をはじめ少年少女雑誌に掲載された作品群の紹介。志のだ寿し、こんにゃくの煮しめ、

葛きりなどをおいしい日本酒と共にテーブルを囲んで戴いて夕方帰宅。

十月四日 米子のアジア博物館・井上靖記念館で開かれた「井上靖友の会」理事会と総会に出席。十月六日 東京四柔会が大丸東京店八階「金城楼」で二時から四時半まで開かれ、母と出席。父が生涯を通して最も愛した四高柔道部の会で、父をはじめ他界された方が近年多く、本当に僅かに残っておられる方々が出席。かつては威勢の良い柔道青年達だったのであろう。

十月九日 旭川市井上靖記念館開館五周年記念の椎名誠講演会「凍った大陸・砂の海―井上靖文学の舞台を歩いて」が財団の協賛で旭川パレスホテルに於いて開かれた。テレビの取材のため「おろしや国酔夢譚」の舞台であるロシアを旅された時のことを具体的に語られた。極寒というのはどんなことになるか。家が傾いて建っているというのはどんなことか。とても分かりやすく楽しかった。この旅は一部分父母も同行した。

椎名先生が「週刊文春」に書かれたことを紹介する。「旭川では「井上靖記念館」設立五周年記念に招かれて、その記念講演などという大それたものをやった。井上靖氏はぼくの一々尊敬してい

た作家であり、生前何度かお宅にお邪魔して先生の好きなブランドイのお湯割などをご相伴し、外国の地でも一緒に空など眺め色々なお話を伺った。当時先生は日本文学の頂点におり、ぼくはその井上文学のいくつかのドキュメンタリーの出演者、というだけの関係でしかなかったが、そんな駆け出しのノラ犬作家にも先生は実に丁寧に真剣に対応してくださった。

先生が亡くなった時、ぼくは南米の小さな港町にいてその訃報を電話で知ったが、聞きながら思わず膝がぐらついた記憶がある。講演には千五百人も人が集まってくれたので最初のうちはえらくアガってしまったが、先生との交流の旅の話をしていくうちにだんだん落ち着いていった。そのあとの主催者三十人ぐらいの人々との打ち上げの宴も楽しかった。』

十月十六日 世田谷文学館で開催される「吉行淳之介展」のオープニング・レセプションに出席。

十月二十七日 日中平和友好条約締結二十周年を記念して中国文学芸術界連合会代表団と中国対外友好協会代表団を歓迎するレセプションがホテルニューオータニ「芙蓉の間」で二時から開かれ、母、修一、佳子と私が出席。

その後私は六時からクラブ関東で行われた日中文化交流協会会長の団伊玖磨氏の講演「美しい感覚と知性」を聴きに行き、会員の一人として皆と夕食をする。

*

一月三日 沼津の井上靖文学館の方がお正月のご挨拶に井上宅に来られる。野田和彦館長、伝田朴也友の会会長、澤田角江さん、木村孝子さんの四人。丁度従兄弟の大谷光敏夫婦が年賀に来宅し、みんな写真撮ったりして賑やかなひととき。

一月二十二日 私に講演の依頼あり。場所は佐賀市の文化センターホールで父井上靖について話をして欲しいとのこと。私は講演などしたことがない。聴衆者に聴きに行つてよかつたと思つてもらえるように話さなければ意味が無いが、そんな自信は無い。こればかりは返事を渋る。

一月二十六日 講演の件で、講演が駄目ならアナウンサーによる質問形式にするからといわれ、お世話になつてゐる写真家の大塚清吾氏の依頼でもあり、お引き受けする。

一月二十九日 第六回井上靖文化賞の贈賞式・祝賀会（山の上ホテル、五時半より）に出席。画家

の加山又造氏が受賞。八十八歳の母はインフルエンザにかかり、高熱のため欠席。選考委員を代表して辻邦生氏の挨拶、乾杯は平山郁夫氏、祝辞は天竜寺の田原義宣氏。二人のお孫さんは加山先生デザインの素敵な着物を着て出席され、お花をおじい様に贈呈された。賑やかであたたかい感じのする祝賀会だった。

一月三十日 沼津の井上靖文学館主催の講演会とビデオ鑑賞会。会場は駿河平の駿河銀行「知求塾」。井上靖記念文化財団後援で私もご挨拶する。講演は友の会会員でペンクラブの会員でもある森井道夫氏の「本覚坊遺文について」。昼食後のビデオ上映は井上靖原作「千利休」。

終了後会員の方の車に分乗して湯ヶ島「白壁荘」へ。会員の方々と懇談をしながらの夕食。六月に結婚した私の長男義明と陽子を皆様に紹介する。部屋をかえて懇親会。修一夫妻、卓也、佳子と私ども夫婦出席。

一月三十一日 一〇時より熊の山へ墓参。天城湯ヶ島町町長はじめ役場と友の会の方々と井上家の人々。例年どおり読書感想文応募作品をお墓へ供え、一人一人お参りする。昨年は前々日に降った雪のためお墓にお参りできなかったが今年は晴天

で寒いが気持ちが良い。

続いて天城会館にて読書感想文コンクール入選者表彰。表彰者による作文の朗読。母に代わって修一のご挨拶。昼食後一時から町民劇団による劇「しろばんば」上演。母はインフルエンザのため初めて欠席する。

二月十五日 「海鳴り」の原稿書き上げる。

二月二十日 「ナナカマド」の原稿書き上げる。

二月九日、十日 沼津の井上靖文学館の方々二〇名と奈良東大寺のお水取り見学に行く。生憎この日は雨。お水取りの学術的な著書を出版された服部貴氏夫妻のご案内でみんなで東大寺管長を訪ねてご挨拶をする。

服部夫妻はこの十数年毎年お水取りを身に來られている。どこで見物したら一番よいとか、たいまつ業が終わったら大半の人は帰られるからそれから東大寺の回廊に上がりなさいとかいろいろ教えて下さる。父は当時「お水取りの立派な本が出版されたねえ。これを見ればお水取りのことは全部分かる。服部君はすごい本を作ったねえ。」と感心して私達に語っていた。

父が亡くなった翌年の平成四年、母、佳子、甫壬、私でお水取りを見物に奈良へ行った。その夜

は晴れていて火の粉が闇夜に舞うのが美しかった。服部夫妻も来られていて回廊で偶然にお会いしたのを懐かしく思い出した。

翌日は自由解散。岩船寺―浄瑠璃寺―般若寺を何人かの会員の方々とまわり、九時半に帰宅。

三月十五日―十七日 「井上靖シルクロードの詩」

―その魅力を語る―佐賀市文化会館中ホール。

学生時代以来の九州、それも佐賀ははじめて。講師大塚清吾氏によりシルクロードでの父の姿が温かく語られた。大塚氏はNHKのシルクロード番組のときカメラマンとして参加された。「大黄河」

「海のシルクロード」「上海博物館」など著書も多数ある。「シルクロード詩集」は父の詩に氏の写真がついている。多くある父の本の中でも私の大好きな一冊となっている。壇上ではバックに父やシルクロードの写真が次々と映し出されていた。講演終了後は「井上靖を語る」という宮崎恒アナウンサー、大塚氏と私の三人のトーク。その他中国人による楊琴や琴の演奏も行われた。客席はほとんど満員でとても良い会だった。村岡屋ギヤラリーでは一周年記念として大塚先生の写真展「敦煌の飛天と千仏菩薩展」が開かれていた。澁刺とした村岡中央麻社長より財団に寄付を頂戴す

る。

十六日 佐賀県の森林公園の中に父が亡くなる三ヶ月前に鑑真和上顕彰会に頼まれて作った和上をたたえる詩「若葉して」を彫った詩碑がある。佐賀は父の小説「天平の薨」の主人公鑑真和上が日本へ行くために大変な苦難の末盲目になって初めて日本に上陸した場所といわれている。日中文化交流のシンボルとしてこの碑は建立されたものである。顕彰会の方々が出迎えて下さる。「建立のときに先生がご病気で来られないと分かった時は皆で本当にがっかりしたのですよ」と今でも残念そうに言われたのが印象に残る。新聞社の人にインタビューを受け、翌日の新聞に写真入で掲載され気恥ずかしい思いをする。碑の周囲は楊州市から贈られた「瓊花」という木で囲まれている。楊州は和上が日本に来るために船に乗った所である。この「瓊花」を「伊豆湯ヶ島にある井上靖のお墓に植えましょう」ということになった。滞在中吉野ヶ里遺跡や孔子廟や唐津焼の窯元などを見物。

平成十一年度

四月四日 静岡県立吉原工業高校、碑の除幕式。

大きな富士山を背にした学校の正門を入った正面に父の碑ができた。同窓会によって新校舎落成記念に建立されたものである。碑文は「潮が満ちて来るようなそんな満たし方で人は己が生涯を何ものかで満たすべきだ」。

父は昭和三十八年十一月に校歌を作詞し（作曲は芥川也寸志）記念講演をしている。校歌作詞のためか昭和三十六年二月、五月、昭和三十七年十月と合わせて四回もこの学校を訪ねている。恒雄と出席し、母の祝辞を代読する。

四月二十日 「平山郁夫展」のレセプションに出席。三越本店ギャラリーで開催。六時から文化勲章受賞を記念して開かれ院展出品作を中心に六十余点が展示されている。平山先生は井上靖記念文化賞の選考委員になって下さっている。母と出席。

四月二十三日 世田谷文学館「横光利一と川端康成」展 オープニングセレモニーに出席。来年井上靖展を予定しているのでそのうちに伺いたいと佐伯彰一館長、生田美秋学芸課長よりお話がある。

五月十四日 旭川井上靖記念館相談役会、クラブ関東、十二時より。古田辰男館長、八島義弘社会教育部長が旭川から上京され、高野昭氏、清水節男氏と例年通り昼食会の後始まる。一年間の報告

につづき、十周年に向けての展示変えと狭い展示スペースをどうしたら有効に使えるかなどが主なテーマで話し合う。

五月十四日 孫家正中国文相一行歓迎レセプションに出席。中華人民共和国建国五十周年を記念して来日。日中文化交流協会の主催でホテルニューオータニで開かれ、母、甫壬と出席。

五月十八日 「改めて今母を想う」出版記念会 赤坂プリンスホテルで父を語る文章はいろんな所に書かせて頂いたが、母井上ふみを語る文章を書いたのは初めてのこと。各方面の沢山の方々の母を語る文章が集められて一冊の本が出来た。

五月二十七日、二十八日・米子井上靖記念館滞在中は展示品のチェックや坂口友の会会長との打ち合わせを行う。

五月二十九日、三十日 米子井上靖友の会のバスツアーに参加。瀬戸内海にかかるしまなみ海道の大橋を次々と渡り、生口島にある平山郁夫記念館や耕三寺を見学。倉敷のアイビスクエアで一泊する。平山記念館では父の原稿や「西から東へ」という書が展示されていた。

六月十七日 滋賀県高月町立図書館の明定義人館長を旭川井上靖記念館の古田館長と一緒に訪ね

る。旭川で十月から約一ヶ月開催する「井上靖の撮った写真展」の写真の借用と打ち合わせのため。

六月二十七日 篠崎敏男氏通夜 築地本願寺 T

BS開局三十周年記念番組で父母、椎名誠氏、大越幸夫氏らとシベリヤへ同行された。シベリア大紀行、日本海紀行、中国などの大型ドキュメンタリーを多く手がけられた大プロデューサー。母、義明とお別れに行く。

七月七日 かえる会、銀座はち巻き岡田。父の「氷壁」の取材を機にはじめた山歩きの会。今回は会員の大村彦次郎氏が新田次郎賞を受賞されたお祝いをかねた会。母、修一夫妻、佳子と出席。

六月八日 沼津井上靖文学館の野田和彦館長が定年退職されるので後任の松本亮三新館長とご挨拶に井上家に来られ、お目にかかる。

七月十七日 「月の光」芸術座にて上演。原作・井上靖、脚色演出・堀井康明、出演・池内淳子、風間杜夫、樫山文枝、他。母の老いを描いた「わが母の記」―花の下、月の光、雪の面―がお芝居になった。この「わが母の記」はフランスでも芝居になって大変な人気でロングランになったと聞いている。父は「どこの国でも親の老いは世界共通のテーマだから」と言っていたのを思い出す。

八月三十日 米子の友の会誌「海鳴り」（財団後援）の原稿を書き上げポストする。

九月五日 天城湯ヶ島町で出している「ふるさと叢書」で祖父足立文太郎の特集をするので思い出を語って頂きたいとの要望で母と孫四人（修一、いくよ、足立文與、福井喜久）が集まる。編集委員会からは大川教育長、伝田友の会会長をはじめ六名の方が来られ、井上家の応接間で足立文太郎を語る座談会が開かれた。足立家の直系の足立文與氏は芦屋から上京。今まであまり知られなかった足立家のハイカラな家風が皆で話し合われた。

九月二十四日 世田谷文学館の佐伯彰一館長が井上家に生田氏、菊池さんと一緒に展覧会開催についてご挨拶に来られる。

十月二日―四日 米子井上靖館友の会の理事会と総会に出席。この日は友の会の五周年記念行事も行われた。

中山美恵子さんの講演「井上靖先生と講道学舎」。中山さんは父が理事長をしていた柔道塾―講道学舎―のママさんで最近NHKの人間ドキュメントにも取り上げられた方。父の姿をあたたかく話された。

つづいて「シルクロード詩集」から十一編を選

んで会員五名の方で朗読した。猛練習をされたと聞いている。

裏千家のお茶会につづき、ビデオ館では映画「天平の薨」が上映された。広い庭と施設があつてこそ出来る、会員の力を合わせた温かな五周年行事だった。

九月二十九日 「井上靖の撮つた写真展」―アフガニスタン・イランの旅から―。平成十一年十月五日―十月三十一日まで主催。旭川市井上靖記念館 後援・井上靖記念文化財団他。旭川市彫刻美術館（井上館の隣）開催。

このような写真があることを三年間くらい相談役会で云い続けてやっと実現した写真展。晩秋の旭川は街路樹のナナカマドの赤い実がいつ来ても美しく、空気もひんやりとしてとても気持ち良かった。準備が大変だったと思いますが観覧者による感想の多くに「見に来て良かった」「歴史の重みを感じる」などと書かれ、「またこのような企画をやつてほしい」と最後に結ばれていた。

十一月八日 沼津文学館から来年一月末の講演会について相談を受ける。「氷壁」のモデルで現在福岡県に住んでおられる石原国利氏にお話を伺うのが良いのではないかと、電話でお願いしてみる。

十一月十日 「ふるさと叢書」の足立文太郎特集の原稿執筆者依頼を頼まれ、朝からいとこたちで電話で依頼する。オーストラリアに住んでいるいとこまでも。

十一月十五日 旭川のナナカマドの会（友の会）会員の方々三十名が父のふるさと沼津、伊豆を中心に四泊の旅で来られる。先月旭川に行つた時話があつたので沼津の文学館で再会する。天気が悪く寒い一日だった。後の旅で雨が降らぬよう願うばかり。帰られた後の報告では、富士山も良く見え、伊豆昭和の森文学館でも大変良くしていただき浦城さんのお蔭と喜ばれた。

十一月十八日 世田谷文学館の来年の「井上靖展」に向けての第一回目の打ち合わせ。靖の一生のうちどこにポイントを置くかなど話し合う。生田美秋学芸課長、菊池香学芸員、財団から小山乃り子さんと私。

十一月二十六日 財団誌「伝書鳩」に「私の備忘録―平成十年度」を書き上げ、ポストする。

十二月一日 竹田巖道氏一周忌。ご遺族からのご招待で母の代理で出席。

竹田さんは元北海タイムスにおられ、後に「一枚の絵」を創業された方。父母は昭和三十八年六

月に佐藤春夫先生ご夫妻をご招待して北海道旅行（札幌、網走、弟子屈、阿寒湖、釧路、小樽）をした。この旅では竹田さんに大変お世話になり、佐藤先生はまだ幼かった竹田さんの次女の継子さんを大変可愛がられたと聞いている。

十二月二日 中国人民対外友好協会代表团、中国作家代表团、中国出版代表团歓迎レセプションがホテルニューオータニで開かれ、母、佳子と一緒に出席。

十二月四日 天城湯ヶ島町の「ふるさと叢書」に「祖父足立文太郎の思い出」を書上げポストする。

十二月五日 「井上靖研究会」創立記念大会。

渋谷の国学院大学本館会議室で発会式と研究発表が行われた。こうした研究会ができ、これから井上靖研究をして下さる若い方が増えてくれば娘として本当にうれしいことである。会長荻久保泰幸国学院大教授と井上ふみの挨拶、曾根博義氏の講演「全集の編集を終えて」、研究発表が高木伸幸、宮崎潤一氏によって行われた。母、修一夫妻、佳子、恒雄と出席。引き続き懇親会が国学院院友会館で開かれた。

十二月六日、九日 米子および日南町行き。米子の井上靖記念館の展示品のチェックなど。「海鳴

り」の編集委員の方たちと夕食。翌日は日南町役場の方が車で迎えに来られ、展示品の賃貸契約のことなどを矢田町長、七瀬助役、足羽文化センター長らと話し合う。父の生前時の町長だった高橋篤史氏を訪ねる。いつ伺っても奥さまと大喜びをしてくださる。無人の館であるにもかかわらず「野明の館」はいつ突然行っても庭はきれいに掃除が行き届いている。

*

一月三日 沼津文学館の松本館長、伝田友の会会長、沢田さんが井上家にお年賀に来られる。いとこたちも年賀に来ていたので昨年同様皆で一緒に写真撮影。おだやかな一日。

一月十日 東敦子さん告別式 聖イグナチオ教会オペラ歌手の東さんは私の高校時代のクラスメイトで世界的なプリマドンナになられた方。父の詩五編（残照、夙、夕映、モンゴル人、比良のシャクナゲ）を高田三郎氏が東さんのために作曲され、舞台でも歌われた。レコードにもなっている。平成七年二月の横浜のはまぎんホールでの演奏会にはご招待を受け、母と出掛けた。ご冥福をお祈りします。

一月十四日 世田谷文学館と井上靖展打ち合わせ。生田美秋氏、菊池香さん、小山乃り子さんと私。ポスターの写真選びも行った。

一月十七日 滋賀県高月町立図書館の明定義人さんが父の撮ったナガール写真展を先の二回に続いて第三弾として行いたいとフィルムを借りに来られる。フィルムの保管が悪く大きく伸ばせるかどうか心配だ。

一月二十三日 「氷壁」のビデオ鑑賞会と小説のモデル石原国利氏を迎えての講演とトークが沼津文学館の主催、井上靖記念文化財団の後援で開催された。トークには私も参加。小説「氷壁」は昭和三十二年朝日新聞に連載され、当時大ベストセラーになり、登山ブームを巻き起こした。昼食をはさんでビデオ（監督増村保造の映画）が上映された。友の会会員のほか一般の方も新聞などを見て来られ、六十余名の参加者があった。石原さんの誠実な人柄と丁寧な話し振りに聴衆の方は大変好感をもたれたようだ。

一月二十四日 近藤芳朗先生の追悼文を書きあげポストする。東大医学部の外科の先生であった自彊術の近藤先生ご夫妻にはじめてお目にかかったのは昭和六十二年。第四高等学校の同窓生戸松信

康氏と一緒に井上家を何回目かに訪ねて来られた時で、私は偶然にお目にかかった。このご縁で私は自彊術を始めた。先生は健康体操である自彊術を国内は勿論、海外にまで広げられた。父がなくなつてから十三回にわたつて「自彊の友」に井上靖特集を組み、父を追悼してくださった。

一月二十五日 加藤九祚テルメス発掘調査報告会 東京都美術館講堂。加藤さんが中央アジアのテルメスの仏教遺跡の発掘にこんな情熱を傾けておられるとは知らなかった。沢山の方が講演を聞きに来られており、また映写を見て実感がわき感激した。父は加藤さんとは西トルキスタンの旅を二回している。そのときの様子は井上靖全集の「遺跡の旅シルクロード」に詳しく記されている。懇親会では各方面でご活躍の方々の間にはさまれて私もご挨拶をすることになつてしまった。

一月二十六日 井上靖文化賞（第七回）の贈賞式と祝賀会が山の上ホテルで行われた。国文学者の大野晋氏が受賞された。財団理事長の井上ふみが賞を贈呈。大岡信氏が選考委員を代表して話をされ、大野晋氏が受賞の挨拶をされた。祝賀会では丸山才一氏が乾杯の音頭を取られた各方面の著名人が沢山出席されて氏の人脉の広さが伺われた。

一月三十日 命日のお墓参りと読書感想文入選者表彰式例年通り、天城湯ヶ島町の行事として行われた。昨年は流感のため欠席した母も今年は参加することが出来た。お墓参りには町長さんをはじめ、関係者、しろばんばの会、沼津文学館友の会、井上靖研究会、井上家の人々が参加し、感想文応募作品を墓前に供えた。敦煌へ行った時買ったというお酒を供えてくださったファンの方もおられた。近年では稀な風のない暖かくて気持ちの良い命日のお墓参りが出来た。午後からは足立文太郎のゆかりの地韭山を尋ねた。「ふるさと叢書」も出来あがり配られた。

二月二十五日 旭川井上靖記念館誌「ナナカマド」に「井上隼雄のこと」を書き上げポストする。
二十九日 米子友の会誌「海鳴り」の原稿を書き上げポストする。

二月三十一日 世田谷文学館「井上靖展」に向けての写真と資料選び。井上家で。

一月五日 佐賀市立図書館の依頼で「大塚清吾さんのこと」を書き上げポストする。

大塚先生は昭和五十四年NHKのシルクロード番組取材の一員として参加され、父と一緒に何日間か中国の敦煌を中心に旅をされたカメラマンで

す。「シルクロード詩集」は父のシルクロード関係の詩と大塚先生の写真を沢山収めた豪華本。その大塚先生が「大塚清吾仕事展」を開かれるのでそのパンフレットにお声がかかった。

二月八日 父の義妹森田衣子叔母の葬儀に出席。

二月十四日 戸松信康氏葬儀に出席。戸松氏は父の第四高等学校の後輩で柔道部の応援団長だった方と聞いている。父の一周忌や七回忌には父が一生愛した柔道部や四高の校歌を歌って送ってくださった。また天城湯ヶ島町の「ふるさと叢書」で四高特集をしたときは四高柔道部時代の知人や友人の原稿依頼を引き受けて下さり、お世話になった。ご本人は住職で葬儀は実家の南松山の香念寺で行われた。大変寒い日で母が欠礼し、私が代理で出席。

平成十二年度

平成十二年度・家の工事や母の入院などで忙しい年でした。

四月十九日 團伊玖磨氏（日本中国文化交流協会会長でもある）夫人和子さんの葬儀が護国寺で行われ、日中文化交流協会を代表して母井上ふみが指名焼香をした。私も同伴。盛大な葬儀に團氏の

悲しみもひときわで胸を打たれた。

四月二十六日 ホテルニューオータニ「鳳凰の間」

で開かれた、中国人民対外友好協会代表団歓迎レセプションに母、佳子といくよと出席。

四月二十九日～六月十一日 世田谷文学館の五周年を記念して「井上靖展」が開かれた。八十三歳で亡くなるまでに長編小説七十四編、短編小説

二百七十編、詩四百六十二、紀行文、エッセー、評論など二千あまりという膨大な作品を残した。

歴史小説（特にシルクロードにまつわるもの）、自伝的小説、現代小説、詩などに加えて、習作時代の未発表作品（探偵小説、ユーモア小説、時代小説、少女歌劇の脚本など）や、丹念に書かれた

取材・創作ノートなども展示紹介した。

期間中に世田谷文学館において記念講演と伊豆湯ヶ島への文学散歩が行われた。

講演「井上靖―人と文学」曾根博義（日本大学教授）

講演「凍った大地・砂の海―井上文学の舞台を歩いてきて」椎名誠（作家）

文学散歩―「伊豆湯ヶ島文学紀行」ゲスト 浦城いくよ

父が幼少の頃を過ごした伊豆湯ヶ島は小説「あ

すなる物語」や「しろばんば」の舞台になっているところ。七時五十分、世田谷区役所に集合して

バスで現地へ。まずお墓参りをして昭和の森文学館、旧井上家跡地のしろばんばの碑、猟銃の碑、小学校などをまわる。気候もよく気持ちのよい一日だった。希望者が多く抽選で五十名の人が参加。

五月二十五日 「父・井上靖の一期一会（黒田佳子著、潮出版発行）」の出版記念会が有楽町のレストラン「ブリアン」で行われた。この日は佳子の誕生日で約八十人が出席。このレストランは父

靖が芥川賞を受賞した頃勤めていた毎日新聞社と同じ場所だったことが会の途中で分り、みんなびつくり。父の不思議な引力というか、縁を感じながらのあたたかな会であった。

五月二十八日 芹沢・井上文学館友の会三十周年の集いが沼津の「ぬまざ軒」で開かれた。両家の関係者、旧制沼津中学の同級生、全国からの読書の代表者、友の会会員が出席した。一九七〇年に芹沢光治良文学館が開館したのと同時に友の会

もできた。そのとき井上靖が「沼津二章」を作詞し、團伊玖磨が作曲した。三年後の一九七三年、駿河平に井上靖文学館が開館した。そのときは芹沢光治良作詞、平井康二郎作曲「駿河なるわがふ

るさと」が沼津合唱団によつて披露された。

当日、松本亮三館長、伝田朴也友の会会長の挨拶、井上ふみの祝辞につづき三十年にわたる特別功労者への感謝状と記念品贈呈、お礼の挨拶とつづき、芹沢、井上両家の遺族たちがそれぞれに父の思い出を話した。私は父とのゴルフの思い出を話させていただいた。そのあとの食事の間は「富士の高嶺に雪は降りつつ」と「駿河なるわがふるさと」の曲がながされていた。

三十周年記念誌がみなに配られた。これは友の会会報をもとに三十年の歩みをつづつたもので懐かしい写真が沢山掲載されている。友の会が出来た時からの会員の方たちもまだまだおられ、三十年の重みを感じずにはいられなかった。修一、佳子、いくよ、そして八十九歳になる母井上ふみも久しぶりに沼津まで出かけた。

六月二日 正午からクラブ関東で開かれた旭川市井上靖記念館の相談役会に後藤典亨教育長、古田辰雄館長、清水節男氏、高野昭氏と一緒に出席。創立十周年に向けて大きな展示変えをする件について話し合いがもたれた。

六月十五日 平山郁夫氏古希を祝う会が東京ドームホテルで開かれ、母と一緒に出席。平山郁夫氏

は井上靖文化賞の選考委員でもある。

六月二十七日 「團伊玖磨の世界」がサントリールホールで午後七時から開かれた。オペラ「夕鶴」、管弦楽組曲「シルクロード」などが團伊玖磨氏の指揮で演奏された。演奏の間のトークのときは父と一緒にシルクロードに行つたときのことを語られた。永い間あこがれていたシルクロードの砂漠の砂の上に座り込んで砂を両手にすくつて拝むようにして感慨にふけつていた井上先生の姿を見たときは、とても感動的だつたと話された。

六月二十九日 NHKラジオ深夜便「作家を語る」に出演した。聞き手は森川靄子アナウンサー。午前一時半からの放送であまり聴いている人もないだろうと軽く考えてお引き受けした。ところがこのラジオ深夜便は多くのファンを持つている番組で、多方面からの反響に驚いた。父から受けた影響、父親としての井上靖、芥川賞受賞の頃のこと、作品について、新聞記者時代の思い出など次々と質問のままに話をした。拙い話しか出来なかつたが、私にとつてはよい経験だつた。質問の内容を参考にしてもつと深く考えていつか文章にしてみたいと思つている。

九月七日 青梅の吉川英治記念館での吉川英治忌

に出席。「新平家物語」をはじめ数々の作品を執筆したゆかりの座敷を開放。特別展示「太平記をめぐって杉本苑子と吉川英治」が開かれていた。沼津文学館の関根さんと同行。いつ来ても縁豊かで庭が美しい。

九月十三日 北京市高級人民法院代表団歓迎パーティが東京會館エメラルドルームで開催。出席。

九月十五日 「伝書鳩」の「私の備忘録より―平成十一年度」を書き上げポストする。

九月十九日 高月町立図書館の明定義人氏がフィルムを返却に來られる。井上靖の撮った写真展の第三弾を計画したがフィルムの保存状態が悪く残念ながら引き伸ばすことが出来ない由。

十月十二日 中国演劇家代表団歓迎パーティに出席した。

十月三十一日 「ふるさと叢書―しろばんばの里井上靖」に祖父井上隼雄についての原稿を書き上げポストする。

十一月二日 「海鳴り」の原稿を書き上げポスト。

十一月三日 東京大丸ミュージアムで開催中の並河萬里写真展へ主人と出かけたが満員の入りだった。一九五六年から四十数年間に渡ってシルクロードの取材撮影をつづけ、今回がシルクロードを

テーマにした最後の写真展の由。素晴らしいの一語につきる。母の祝い状のはがきが展示されているのを見つけた。並河夫妻は私どもが伺ったことをとても喜んでくださり、分厚いカタログ本にサインをして下さる。

十一月七日 沼津井上文学館文学散歩―秋の京都を訪ねる―法然院―哲学の道―橋本関雪記念館―真如堂―宗忠神社―吉田神社―河井寛次郎記念館―母井上ふみの「風の通る道」で紹介された吉田山付近を歩き、靖と関係のあった二人の記念館も見学する。お昼は白沙村荘（関雪の邸宅）で。何年前か米子の井上靖記念館へ学生を連れてこられ、お会いした橋本婦一理事長にお目にかかるのを楽しみにしていたが、なんと一週間前にお亡くなりになったのを新聞で知った。

暖かい一日だったが紅葉にはまだ早かった。

十一月十八日 米子「アジア博物館・井上靖記念館」創立七周年祝賀夕食会。横地治男会長による内々の祝賀会。創立以来運営に関わった人たちが呼ばれ、カニ鍋による山陰らしい祝いの宴。

一月十八日

米子「井上靖記念館」の友の会の理

*

事会と総会が開かれ出席する。十二年度事業報告と会計報告および十三年度の事業計画など。

この日は日本全体が寒波に覆われて寒く、東京も雪の予報なので急ぎ一泊で帰京する。

一月二十五日 山の上ホテルにて二時半から井上靖記念文化財団の理事・評議員会開催。議題は十二年度の事業報告および会計報告と十三年度の事業計画と予算。続いて第八回井上靖文化賞の贈賞式とレセプションが開かれた。受賞者は漢字学者の白川静氏。

理事長の井上ふみが欠席のため井上修一常務理事から賞が贈呈され、考古学者の樋口隆康氏が選考委員を代表して挨拶を述べられた。続く受賞者挨拶で白川静氏は「このたび井上靖文化賞を頂くことになって感銘に堪えない。字書の三部作を出してから賞を頂くことが多くなったが、独りで頂くのははじめてである。井上文学は、私にとつては一代代ほども違うような感じがするが、実際は私が三つ年下であるにすぎない。私がまだ十分な研究生活にも入らぬようなころに井上文学は鬱然たる巨峰であった……」と述べられた。

白川静氏は明治四十三年生まれの九十歳。ユーモアにとみ、活力あふれた話し振りに皆びつくり

した。

一月二十六日 日本歌人クラブ会長の藤岡武雄氏がリーダーをつとめられる文学探訪の会の富士文学探訪の会の方々六十七名が井上家を訪問された。私は前日の井上靖文化賞の祝賀会で遅かったので井上家泊で待機。北風が強い寒い日というのに応接間は満員。何か話をと言われても何をどう話してよいのか分からないので質疑応答ということにした。さすが文学探訪の会の人々、次から次へと出る質問に一時間はまたたくまに過ぎた。

一月二十七日、二十八日 あすなる忌。

東京も夕べの夜半から粉雪が降り続き、車はとも動かすことができないので何年かぶりで新幹線と駿豆鉄道で伊豆湯ヶ島へ。毎年のことながら白壁荘の父がいつも使っていた離れに泊まる。井上靖研究会の方々はすでに来られており、夕食後はこの離れの部屋に集まり、いろいろを囲んで井上文学について懇談する。

翌二十八日、天気は晴れたがお墓のある熊野山へは積雪のため登ることは出来ない。井上家跡地にある「しろばんば」の碑の前で例年どおり読書感想文コンクール応募作品を供え、町長はじめ町の関係者、沼津文学館友の会、井上靖研究会、井

上家の人々がみんなでお参りをする。午後からは読書感想文コンクールの表彰式。最優秀賞の小学生、中学生、高校生一人づつが壇上で自分の作文を読む。活字離れが言われている現在、こんなに熱心に一つの作品を読み、考えて書く少年少女たちがまだまだ全国に沢山いるのは心強くうれしいことと毎年この表彰式に参加して思う。

そのあと井上靖研究会が開かれた。講演・荻久保泰幸・国学院大学教授・井上靖研究会会長。

研究発表・西座理恵・早稲田大学院生「井上靖文学に関する修士論文の展望―主に仏教との関わりについて―」

二月二十一日 三島文学探訪の会の方々九十名が大型バスで井上家に來られる。応接間に入りきれないので二回に分けて入って頂く。この日も質疑応答にしよう。三島は父の生前から井上文学館のある所。富士市も三島市も自伝的小説「しろばんば」「夏草冬澍」の舞台になつてゐる場所。言葉のなまりにも親近感があつてうれしい。

(井上靖・長女)

井上靖研究会

―発足について―

井上靖の一周忌を過ぎた頃から、井上文学に関心ある人々の交流をはかり、その研究を推進するために「研究会」を組織してはどうかと言う話が度々持ち上がっていたが、そのままに時間が流れていた。

平成十一年七月、各方面からの要望に応える有志の人々の努力によって、いよいよ実現に向けて行動を開始する運びになった。

萩久保泰幸氏、曾根博義氏、藤沢全氏、笹本正樹氏、森井道男氏、工藤茂氏、伝馬澄彦氏、金子秀夫氏、瀬戸口宣司氏、福田美鈴氏などの研究者が発起人となって実現したものだ。

井上靖研究会創立記念大会

日時・平成十一年十二月五日午後一時から

会場・東京都渋谷区國學院大学本館会議室

会長挨拶・萩久保泰幸

「井上靖研究会創立記念大会」

研究発表・宮崎潤一

「井上靖の童話―詩的視座から」

研究発表・高木伸幸

「『水壁』論―『孤独と『信頼』―」

記念講演・曾根博義

「全集の編集を終えて」

井上靖研究会総会

日時・平成十二年七月二十一日

場所・東京渋谷区國學院大学本館

井上靖研究会・研究論文発表

日時・平成十三年一月二十八日

場所・静岡県天城湯が島町・湯が島温泉会館

講演・萩久保泰幸

「戦後派の文学」

研究発表・西座理恵

「井上靖文学に関する修士論文の展望」

―主に仏教との関わりについて―

原稿募集

井上靖に関する「論文」「エッセイ」「資料紹介」等、募集中。(締切・平成十三年九月末日)

事務所・東京都渋谷区東四―十一―二十八

國學院大学 瀬戸口宣司

財 団 ・ 事 業 報 告

平成十年度〜十二年度

井 上 修 一

本財団の主な事業をご報告いたします。

平成十年度

(一) 第六回井上靖文化賞発表ならびに贈賞
文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリストなどの方々からご推薦いただきました贈賞対象者を、数次にわたる選考で四氏に絞り込んだ後、選考委員の先生方による最終選考会が十一月十七日に山の上ホテルで行われました。その結果、加山又造氏に贈賞が決まり、直

ちに報道、出版関係者に通知されました。

また、平成十年一月二十九日には、百四十余名の方々のご参加を得て、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

なお、選考委員の先生方は大岡信、辻邦生、樋口隆康、平山郁夫の四氏です。

(二) 井上靖講演会

平成十一年三月十五日、佐賀市「文化会館」にて行われた村岡屋主催の講演会「井上靖を語る」に講師を派遣いたしました。

(三) 井上靖の生原稿の寄贈

平成十一年三月五日井上靖の遺品の内、生原稿の大半を神奈川近代文学館に寄贈いたしました。

(四) 中国人民対外友好協会代表团による墓参

平成十年十月二十四日、日中文化交流協会の招きで来日した中国人民対外友好協会代表团が、本財団の案内により天城湯ヶ島町の井上靖の墓にお参りし、旧邸跡ならびに伊豆近代文学館を見学しました。

(五) 井上靖の墓参と井上靖作品読書感想文コンクール

平成十一年一月二十五日に静岡県天城湯ヶ島町墓地にて同町主催、静岡県駿東郡駿河平の井上文学館ならびに本財団主催の墓参会「翌檜忌」(あすなろき)が行われました。

また、同日天城湯ヶ島町「湯の国会館」にて天城湯ヶ島町主催、本財団共催の「追悼・井上靖」の行事が行われました。これに引き続いて、同町主催、本財団協力で第七回「井上靖作品読書感想文コンクール」入選者表彰がありました。

表彰式の後、天城会館内「天城劇場」にて同町

ならびに同町の「文学のふるさと実行委員会」の主催、本財団協力で天城湯ヶ島町民劇団による「しろばんば」の劇が上演され大好評を得ました。

なお、直接本財団が関係したものではありませんが、当二十五日の午前、湯ヶ島小学校校庭にて、「しろばんば」の記念像(山田収氏作品)が建立し、除幕式が行われました。

(六) 役員

平成十年度の本財団の理事、評議員は次の方々です。(五十音順)

理事長 井上ふみ

常務理事 井上修一

理事 大岡信 相賀徹夫 上林吾郎

小西甚右衛門 佐藤亮一 高崎芳郎

徳間康快 野間佐和子 平山郁夫

横地治男

三木啓史

監事 井上卓也 浦城幾世 大越幸夫

大波加弘 尾崎秀樹 角川歴彦

嶋中雅子 黒田佳子 高野昭

高原須美子 緑川亨

(平成十一年三月三十一日)

平成十一年度

(一) 第七回井上靖文化賞発表ならびに贈賞

文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリストなどの方々からご推薦いただきました贈賞対象者を、数次にわたる選考で四氏に絞り込んだ後、選考委員の先生方による最終選考会が十一月十一日に山の上ホテルで行われました。その結果、大野晋氏に贈賞が決まり、直ちに報道、出版関係者に通知されました。

また、平成十二年一月二十六日には、百五十余名の方々のご参加を得て、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

なお、選考委員の先生方は大岡信、菅野昭正、樋口隆康、平山郁夫の四氏です。

(二) 井上靖講演会

平成十一年六月二十三日、昭和女子大学「人見記念講堂」にて行われた「井上靖講演会」ならび

に平成十二年一月二十三日、沼津の井上靖文学館にて行われた「映画『氷壁』鑑賞会」に講師を派遣いたしました。

(三) 井上靖展

平成十一年十月五日から三十一日まで、「井上靖が撮った写真展——アフガニスタン・イランの旅から——」展が旭川市彫刻美術館にて、旭川市井上靖記念室主催、本財団後援で行われました。

(四) 井上靖研究会発足

財団の直接の事業ではありませんが、「井上靖研究会」が発足したことをお知らせいたします。平成十一年十二月五日、國學院大學本館会議室にて井上靖研究会の創立記念大会が行われました。会長は國學院大學教授萩久保泰幸氏です。この会は純粹に学問的なもので、今後の井上靖研究の中心的な役割を担うものと期待されています。

(五) 井上靖の墓参りと井上靖作品読書感想文コンクール

平成十二年一月三十日に静岡県天城湯ヶ島町墓地にて同町ならびに静岡県駿東郡駿河平の井上文

学館、本財団主催の墓参会「翌檜忌」（あすなるき）が行われました。

また、同日天城湯ヶ島町「湯の国会館」にて天城湯ヶ島町主催、本財団協力の「追悼・井上靖」の行事が行われました。これに引き続いて、同町主催、本財団協力で第八回「井上靖作品読書感想文コンクール」入選者表彰がありました。

(六) 足立文太郎特集

天城湯ヶ島町刊の「天城湯ヶ島町・ふるさと叢書 第九集」にて本財団協賛により井上靖の岳父、足立文太郎の特集が行われました。足立文太郎は恩賜賞を取った解剖学者で、『比良のシャクナゲ』を初めいくつかの作品のモデルになっています。なお、足立文太郎が留学したドイツのシュトラースブルク大学（現フランス・ストラスブール大学）で平成十二年に足立文太郎記念室の開設が予定されています。

(七) 役員

平成十一年度の本財団の理事、評議員は次の方々です。（五十音順）
理事長 井上ふみ

常務理事

井上修一

理事

大岡信 相賀徹夫 上林吾郎

小西甚右衛門 佐藤亮一 高崎芳郎

徳間康快 野間佐和子 平山郁夫

横地治男

三木啓史

監事

井上卓也 浦城幾世 大越幸夫

大波加弘 尾崎秀樹 角川歴彦

嶋中雅子 黒田佳子 高野昭

高原須美子 緑川亨

（平成十二年三月三十一日）

平成十二年度

(一) 第八回井上靖文化賞発表ならびに贈賞

文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリストなどの方々からご推薦いただきました。贈賞対象者を、数次にわたる選考で四氏に絞り込んだ後、選考委員の先生方による最終選考会が十一月十七日に山の上ホテルで行われました。その結果、白川静氏に贈賞が決まり、直ちに報道、出版関係者に通知されました。

また、平成十二年一月二十五日には、百五十余名の方々のご参加を得て、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

なお、選考委員の先生方は大岡信、菅野昭正、樋口隆康、平山郁夫の四氏です。

(二) 井上靖講演会

平成十二年五月二十八日、沼津市「沼津軒」五Fホールにて「芹沢・井上文学館」創立三十周年記念の集いが催され、本財団の協力により井上靖に関するパネル・ディスカッションが行われました。

(三) 井上靖展

平成十二年四月二十九日から六月十一日まで、区立世田谷文学館の開館五周年記念事業の一環として「井上靖展」が本財団後援で行われました。

(四) 井上靖の墓参と井上靖作品読書感想文コンクール

平成十三年一月二十八日に静岡県田方郡天城湯ケ島町旧井上靖邸跡にて同町主催、静岡県駿東郡駿河平の井上文学館、本財団共催の墓参会「翌檜

忌」(あすなろき)が行われました。

また、同日天城湯ケ島町「天城温泉会館」にて同町主催、本財団協力で第八回「井上靖作品読書感想文コンクール」入選者表彰がありました。

(五) 井上隼雄特集

本財団の編集協力によりまして天城湯ケ島町刊の「天城湯ケ島町・ふるさと叢書 第十集」に井上靖の父、軍医井上隼雄の特集が掲載されました。又同集には日本近代文学館の原祐子氏の作成による医家井上家に伝わる蔵書目録も載っています。

(六) 役員

集英社会長小島民雄、作家黒井千次、作家三好徹の三氏が新しく評議員にご就任下さいました。お忙しい中とは存じますが、なにとぞよろしくお願ひいたします。

また本財団の役員 佐藤亮一理事、徳間康快理事、尾崎秀樹評議員がお亡くなりになりました。長年のご指導、ご支援に感謝いたしますとともに、ご冥福をお祈りいたします。

平成十三年三月三十一日現在、本財団の理事、評議員は次の方々です。(五十音順)

理事長 井上ふみ

常務理事 井上修一

理事 大岡信 相賀徹夫 上林吾郎

小西甚右衛門 高碓芳郎 野間佐和子

平山郁夫 横地治男

監事 三木啓史

評議員 井上卓也 浦城幾世 大越幸夫

大波加弘 角川歴彦 黒井千次

黒田佳子 小島民雄 鳴中雅子

高野昭 高原須美子 緑川亨

三好徹

(平成十三年三月三十一日、井上靖記念文化財団
常務理事)

鳩のお知らせ

平成十一年

★一月二十九日・井上靖文化賞の贈賞式と祝賀会が東京都千代田区の山の上ホテルで行われた。受賞者は日本画家の加山又造氏。賞贈呈・井上ふみ、選考委員挨拶・辻邦夫、乾杯・平山郁夫、祝辞・(大本山天竜寺) 田原義宣の各氏。

★一月三十一日・井上靖の墓参会「あすなる忌」が靖の故郷静岡県天城湯が島町でおこなわれた。

★同日、井上靖作文コンクールの発表会がおこなわれた。会場・湯ヶ島温泉会館天城劇場ホール。

★三月六日・NHK放送BS九チャンネル「ときめきにつぼん」で「文学の故郷天城湯ヶ島―天

城に魅せられた文豪たち」が放送された。

★三月十五日～十七日・「井上靖シルクロードの詩―その魅力を語る―」の会が開催された。講師・写真家の大塚清吾氏。アナウンサー・宮崎恒。会場・佐賀市市文化ホール。

★四月四日・静岡県立吉原工業高校で、井上靖の碑の除幕式が催された。碑句・「潮が満ちて来るやうなそんな満たし方で人は己が生涯を何ものかで満たすべきだ」

★四月二十七日・「シルクロードコンサート」が札幌コンサートホールKitaraで開かれた。指揮・團伊玖磨、十束尚宏。管弦楽・札幌交響楽団。井上靖「シルクロード詩集」より栗原小巻氏が朗読。これは「シルクロードの煌めき―中国・美の至宝」展開催を記念して行われたもの。主催・北海道新聞日本中国文化交流・財団法人主音楽協会。

★七月五月初日～八月二十八日・井上靖原作『月の光』が東宝現代劇特別公演として芸術座で上演

された。脚色演出・堀井康明、出演・池内淳子・風間杜夫・水野真紀・樫山文枝・大空真弓・木村有里・正木慎也・荻島真一。

受賞者は国語学者の大野晋氏。賞贈呈・井上ふみ、選考委員挨拶・大岡信、乾杯・丸谷才一、来賓祝詞・（東京大学名誉教授）伊東俊太郎の各氏。

★十月五日〜三十一日・「井上靖の撮った写真展―アフガニスタン・イランの旅から―」旭川彫刻の美術館で開催。後援・旭川井上靖記念館他。

★十一月十七日・井上靖文化賞最終選考決定。

★十二月五日・「井上靖研究会」創立記念大会が東京渋谷区の國學院大學本館会議室にて開催された。当日出席六十数名。國學院大學教授・伝馬義澄氏の司会で進行。会長挨拶⇨荻久保泰幸氏。研究発表⇨宮崎潤一「井上靖の童話―詩的視座から」、高木伸幸「『氷壁』論」―「孤独」と「信頼」、記念講演⇨曾根博義「井上靖全集の編集を終えて」

平成十二年

★一月二十六日・井上靖文化賞贈賞式及び祝賀会が東京都千代田区の山の上ホテルで開催された。

★一月三十日・湯ヶ島町にて井上靖の墓参会「あすなる忌」がおこなわれた。

★同日・井上靖作文コンクールの発表会。

★四月二十九日〜六月十一日・「井上靖展」が東京都世田谷区南烏山の世田谷文学館で開催された。習作時代の未発表作品原稿の一部が展示された。

★五月十三日・講演・曾根博義日本大学教授・「井上靖―人と文学」。世田谷文学館にて。

★五月二十七日・講演⇨作家・椎名誠・「凍った大地・砂の海―井上靖文学の舞台を歩いてきて」世田谷文学館にて。

★五月二十五日・「父・井上靖の一期一会」（黒田佳子著）の出版記念会が催された。有楽町のレ

ストラン「ブリアン」にて。

★五月二十八日・芹沢・井上靖文学館・友の会三十周年を記念して、「共時・通事・三十年」の集いが催された。場所は沼津市内「ぬまざ軒」にて。記念誌「朝なぎ夕なぎ三十年」が刊行される。

★七月二十一日・「井上靖研究会総会」が東京都渋谷区にある國學院大學にて、ひらかれた。

平成十三年

★一月二十五日・井上靖文化賞贈賞式と祝賀会が、東京都千代田区の上ホテルで開催された。受賞者は漢字学者・白川静氏。賞贈呈・井上修一、選考委員挨拶・樋口隆康、乾杯・菅野昭正、来賓祝詞・（日本地名研究所所長）谷川健一の各氏。

★一月二十八日・井上靖の墓参会「あすなる忌」が天城湯が島町で行われた。

★同日・井上靖作文コンクール発表会が天城湯が島町で開催。

★同日・一月二十八日・「井上靖研究会」主催の研究論文発表が天城湯ヶ島町で開催された。講演・荻久保泰幸（國學院大學教授）Ⅱ「戦後派の文学」、論文発表・西座理恵（早稲田大学大学院生）Ⅱ「井上靖文学に関する修士論文の展望」主に仏教との関わりについて」

井上靖研究会・会員募集

入会費千円と会費Ⅱ会費は（年額）・団体一万円、一般五千円、学生三千円。

事務所・〒一五〇・八四四〇 東京都渋谷区東四
一―二十八 國學院大學 瀬戸口宣司宛 電話
〇三（五四六六）〇一三〇

御寄贈・有り難うございます。

『光太夫だより』大黒屋光太夫顕彰会会報・鈴鹿市若松中一丁目の一〇

『光太夫シリーズ』三冊。6・「光太夫が幕府に

伝えたロシア」(都築正則)、7・「遭難以前の大黒屋光大夫」(中見秀雄)、8・「光大夫の帰国と松平定信」阿部好一。大黒屋光大夫顕彰会刊行。

『日中文化交流』日本中国文化交流協会発行

『青森近代文学館報』青森県立図書館・青森県立

近代文学館発行、青森市荒川字藤戸一一九一七

『日本近代文学館』日本近代文学館発行・東京都

目黒区駒場四一三一五五

『記念館だより』旧制高等学校記念館・旧制高等

学校記念館友の会・松本市三一一一一

『日本現代詩歌文学館』日本現代詩歌文学館、日

本現代詩歌文学館振興会。

『芹沢・井上文学館友の会会報』芹沢・井上文学

館友の会・沼津市我入道まんだが原。

『赤い実の洋燈』井上靖ナナカマドの会発行・旭

川市四区一条一丁目・井上靖記念館内

『ふるふる』旭川市生活交流部広聴広報課発行

旭川市六条九丁目。

『富士正晴全国同人雑誌賞』富士正晴全国同人雜

誌実行委員会・徳島県三好郡山城町末貞

城山町公民館内。

「草枕文学賞」作品募集パンフレット、熊本県文化企画課内熊本県「草枕文学賞」実行委員会。

『天城湯ヶ島町ふるさと叢書』天城湯ヶ島町文学のふるさと実行委員会編集・湯ヶ島町発行。

『あかい奈良』グループ丹発行。

『井上靖におけるヴァレリーの詩論受容』若き

日の文業を視座として」藤沢全著。

『「氷壁」論』——「孤独」と「信頼」——高木伸幸

『朝なぎ夕なぎ三十年』芹沢・井上文学館友の会

三十周年記念誌。

『K氏のベレー帽』父山本健吉をめぐって』山本

安見子著 (河出書房新社)。

『運河のある風景』——戦争中の中学三年生——福田

達夫著。

『石笛』石笛の会発行・山形健長井市巾道二一一

六一四四

『伝書鳩・もうひとつのIT』黒岩比佐子著。

『思索と抒情』——近代詩論文——傳馬義澄著。

引き出し整理

新聞紙面切り抜き

平成十二年八月十九日 夕刊読売新聞

「わが二十世紀人」

―戦後日本の不安と心意気鋭敏に―

堀田 力

「この時の津上の眼は、そのためにどうしてもしき子が彼から別れて行けない、あの冷たいそのくせ冷たいままでねっとり^{ほろし}と燃えているような、放^{ほう}恣^しな、濡れた眼をしていた」

井上靖が、一九五〇年、芥川賞を受けた「闘牛」の中の文章で、大坂新夕刊の編集局長津上が阪神球場で闘牛大会を行うという企画に乗り出す気になった時の、その表情の描写である。観客が牛の勝負に賭けるといふところに引かれ、津上は、憑

かれたようにのめり込んで大会の開催までこぎつけるが、開催予定三日間のうち二日は雨にたたられて大損するという話である。

*

「五〇年、私は京都市立堀川高校の一年生、文芸部員であった。井上作品の、一途に事業に取り組む孤独な男にとらわれていたが、今にして思えば、井上靖は、戦後の日本を生きる男たちの不安と心意気とを鋭敏にとらえ、魅力的に描き出したと評価できよう。

その時期、人々は、衣食住を求めて懸命に働いた。その中で、志のある学生たちは、貧しい人々を救いたいとの正義感に燃え、平等を説くマルクスの理念に魅せられて革命運動に走った。その暴力性と組織の階級性についていけなかった学生たちは、絶対君主に代わる心よるべを、実存主義に求めた。サルトルやキルケゴールの本を小脇にかかえた文学青年たちが、水っぼいコーヒースズリながら、「人は、ただ存在するだけである」と論じた。人があふれて行方も見えなかつたあのころ、そういう、ある意味では当たり前のことを言いながら、不安と戦っていたのである。言っていないと、不安で、自分の存在意義を実感出来な

かつたのである。

*

その不安に応え、彼らのエネルギーを前向きにする役割を、井上作品は期せずして担った。

そのころ「あすなる物語」を、私は何度読んだことであろう。明日は檜ひのきになろうと願ひ、努めながら、ついに檜にはなれない翌檜あすなるの木。その説話に託した青少年期の物語は、夢と不安とあふれる情感の中で揺れていた私の心を、ひたしてくれた。

自伝小説の一つ「北の海」に現れる西平のおじい、くめさんは、高校浪人中の主人公に言う。「わしはおもうんだが、人間という奴は、一生のうち何かに夢中にならんと。何でもいいから夢中になるのが、どうも、人間の生き方の中で一番いいようだ。(中略)そうすりや、人間、死ぬ時悔いはなかんべ」井上靖は、何かに夢中になる男を、次々と描いた。

「氷壁」の主人公魚津、「風林火山」の主人公山本勘助、「蒼き狼」の主人公成吉思汗など、時代や地域が異なっても、井上作品の主人公は、それぞれに何かにとりつかれ、全力を注ぎ込んでたかいたながら、ひどく孤独で冷めている。夢中に

なる事業は何でもよい。本人がこれだと思つたものである。本人はその事業に成功して何かを得たわけではない。金、権力、名誉ではなく、事業や学問の成功、成果ですらなく、自分の全能力を発揮すること自体が目的なのである。

*

井上作品のヒロインは、長崎での被爆（「城砦」）、神の巫女（「額田女王」）といった宿業を担いながら、懸命に自分の生き方を貫こうとする女性のほか、経済的には恵まれた人妻でありながら、これに飽き足らず生きがいを求め、その表れとして主人公に恋をしたりするタイプの女性、あるいは世間のルールを無視して自由奔放に生きる女性である。どのヒロインも、激しい孤独に耐えながら、自分らしく生きようとする強い意志を火花のように飛び散らせ、この上なく美しい。

*

このように井上靖が描き出した人物は、男女ともに、二十世紀日本が全体主義から個人主義の時代に移る際に直面せざるを得ない、個の不安と生きがいという課題に身をもって取り組んだ人々であった。過去や他国に舞台をとった作品ですら、そういう視点で人物を描いていると言えよう。

時代は二十一世紀に移る。二十一世紀は、日本人が、それぞれの個性を生かして共に生きる社会を創り出すべき時代である。新しい主人公は、個を確立したうえで、人々とネットワークを組みながら、新しい社会をつくることに取り組む人物であろう。

井上作品には、そういう人物は登場しない。そういう人物は己の思いを実現することに生命すら賭けようとする井上作品の主人公たちの生きざまを経て、はじめて世に登場するのである。

(弁護士・さわやか福祉財団理事長)

平成九年八月三十日 中日新聞県内版 「愛知名作の舞台」 井上靖の「しろばんば」

「豊橋の若松園・喫茶部周辺」

少年時代の思い出は、よどんだ黒い水のような中から、いつでも鮮やかに浮かび上がる。なまめかしくて恐ろしい夏の夜の出来事などは特に：：井上靖にとって豊橋の思い出は、黄色いゼリーの味と、どこまでも続く暗い夜道だった。自伝

的小説「しろばんば」の主人公、洪作少年が豊橋を訪れたのは、大正五年ごろの夏だった。

洪作は、祖父の妾（めかけ）で血のつながらない祖母おぬいばあさんと、伊豆天城の山村で暮らしていた。豊橋は軍人だった父の赴任地。両親と妹が住むこの町を小学校二年の洪作は、おぬいばあさんと訪れた。数日を過ごし天城に帰る前夜、忘れられない出来事が起こる。

母や妹達と札木町の若松園という菓子屋の喫茶部で、黄色いゼリーを食べた。「スプーンを入れるのが勿体ないように、美しく見えた。口に入れると溶けるように美味（うま）かった。」

若松園を出た洪作に母が「もうこのまま豊橋に居るか」と尋ねる。おぬいばあさんだけ帰って、自分があとに残るなんて。洪作は「おばあちゃんと帰る」と繰り返す。いつになく優しくかった母は不機嫌になり、また意地悪く冷たく映った。この後、洪作は母親等とはぐれてしまう。

「おばあちゃん」と叫びながら夜道を走りに走る。途中で機関車の音を間近に聞き、木柵（もくさく）に沿ってどこまでも。錯乱状態になりながら真っ暗で恐ろしい田んぼ道をさまよった末、おぬいばあさんに助けられる。

洪作にとつて、ゼリーの甘さは母への甘美な気持ちの発露。暗い夜道をさまよい歩いたのは、育ての親のおぬいばあさんと、母との関係で揺れ動く心象風景ではなかつたか。洪作は結局、天城に帰つた。

どこまでが井上靖の実体験かは分からない。当時の豊橋は、現在の市役所周辺に歩兵十八連隊、高師原には練兵所があつた軍都。井上靖と豊橋のかかわりを研究している豊橋市牟呂町、横田正吾さんは「井上靖の父親は軍医で、家は札木町に近い曲尺手（かねんて）町付近にあつた官舎らしい」と推測する。

若松園は今も札木町にあるが、本店の向かいにあつたという喫茶部はもはや現存しない。若松園の先代社長の妻山田清子さんは、「喫茶部は昭和初めにあつたと聞いています。でも、井上先生が大人になって、この店を訪れたという話は聞いていません」という。

母と、おぬいばあさんへの錯綜（さくそう）する愛情。少年の日の思いを物語につづつた豊橋に、作家本人は足を運ぼうとしなかつたのか。小説の舞台は大正初期。山田さんの証言によれば、洪作が滞在した時代には若松園の喫茶部はなかつたは

ずだ。

しかし、こんな想像が働く。大正初期の豊橋で夏を過ごした井上靖は、昭和になつて再びこの地を訪れ、若松園に開設された喫茶部に立ち寄つた。作家の分身の洪作少年の体験は、この前後にわたる思い出から、小説に仕立てられたのではと。こんな考えがめぐるのも、少年時代の夏の世のミステリーらしい。

（宮本隆康）

編集後記

『伝書鳩』六号ができました。刊行は「まだか」との問い合わせを幾人もの方々からいただきながらも、大変遅れましたことを、お詫び申しあげがます。

今号6号は、遅れたぶんだけを併せての、編集になつてしまいました。

しかしながら、掲載させていただいた原稿は、力のはいつた、内容の濃いものばかりで、感謝いたしております。

また、この間、九十一歳となる理事長井上ふみの入院時には、多くの方々から励ましをいただきました。こちらも春の到来と共に大変元気になつてまいりました。

一休みしてしまつた伝書鳩ですが、また羽を整えて飛翔します。

黒 田 佳 子

伝書鳩 第六号 二〇〇一年 六月刊行
編集者 黒 田 佳 子
編集所 横浜市青葉区新石川三一八―九
発行 (財)井上靖記念文化財団発行